
ドラゴンクエスト? ~天恵物語~

冬生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンクエスト？ ～天恵物語～

【Nコード】

N7878Z

【作者名】

冬生

【あらすじ】

世界樹に女神の果実が実った時、神への道は開かれ永遠の救いを得る。

天使達はその言い伝えを信じて、世界樹に星のオーラ 人間の感謝の結晶 を捧げ続けていました。

ウォル口村の守護天使となったりタもまたその一人でしたが……突然起こった出来事により、彼女の運命は大きく変わってしまったのです。

注)ドラゴンクエスト?の二次創作です。そして、他サイトとの重複投稿だということをご了承の上でお読みください。

登場人物設定

登場人物設定

〈マイパーティー〉

*リタ（職業：旅芸人）

外見上15歳でウォル口村を守護する天使。銀髪（肩らへんまでのストレート）で紫色の瞳を持つ、なかなかの美少女。イザヤールという上級天使の師匠がいる。

どこか抜けているものの、自分の職務には一生懸命。大人しそうに見えて意外と快活である。

とあることをきっかけに翼と光輪を失い、ウォル口村に滞在する。

*アルティナ（職業：戦士）

登場は第二章

ルイーダの酒場で一匹狼していた、ぶっきらぼうな青年。16歳。黒髪に青い瞳を持ち、顔は結構整っているので仲間探しに苦労しないかと思ったら、性格に難ありで一度もパーティーが成立したことはない。

戦士のくせに甲冑が嫌い（許容の鎧はある）。

結構に暗い過去を持つ。

*カレン（職業：僧侶）

登場は第三章

出家した元お嬢様。クセのある長い金髪を後ろで束ね、茶色の瞳を持つ。基本お嬢様口調（〜ですわ、など）。

アルティナとは犬猿の仲。

*レッセ（職業：魔法使い）

登場未定（エルシオン学院）

エルシオン学院を最年少で卒業した優等生。現在14歳。赤い髪で翡翠色の瞳を持つ。

第一章 天使の落ちた村

少女が一人、守護天使の像の前で突っ立っていた。銀髪に紫色の瞳が印象的な、なかなかの美少女だ。しかし、その少女の顔は曇っていた。

それも全て、この目の前の天使像のせい……という訳ではないが、この像も顔を曇らせる原因の一つになっていた。

(にしても、全っ然私に似てないよね……)

初めて石像を見た時も、同じ感想を持ったものだった。

浮かない顔で石像を眺めていると、その時「おい」と誰かに声をかけられた。

この声の主は……村長のドラ息子だとか言われている、ニードだ。

「えーと……なんか用ですか？」

「お前だよな。大地震のとき、どさくさに紛れてきたヤツは。守護天使と同じ名前らしいけど……実のところはどうなんだかなあ」

その言葉を聞いて、少女 リタはさすがにムツとした。実際、言われた通りなので何も言い返せないのだが。

「本当に変な奴ですよ。着てる服も変なら、どこから来たのかも言わないし」

「だいたい、旅芸人つてのも本当なのかよ？」

服のセンスで人につべこべ言われたくない、と内心毒づきながらもリタはやっぱり何も反論しなかった。

(これ以上、この村で騒ぎを起こしたくない)

よって、リタはひたすら沈黙を守り耐えて来た。

自分の出自を言っても、混乱を招くか馬鹿にされるかの二つに一つ。良いことなんて、決して無い。言うつもりなど、さらさら無い。

(それに、わたしは人間じゃないんだから……)

リタは、天使界から(文字通り)落ちてきた天使。

しかも落ちたこの村を護る、守護天使だったのだ。

「ニードさんはな……最近リツカがアンタにベツタリだから、つまらなく思っでいらっしやるんだぞ！」

「おいっ、バカなこと言うな!!」

ニードに敬語を使うその男は、結構おつちよこちよいみたいだ。

(そんなんじゃない。リツカは皆に優しいよ)

ニードがリックに惚れているのは明らかに分かるが、それを今わざわざ言うつもりは無い。

そしてそこに、リタの唯一の救世主がやってきた。

「ちょっと二人共、うちのリタに何か用なの?!」

「げっ……リック!」

リックは、オレンジ色のバンダナが特徴的な宿屋の娘である。そんな彼女の怒った顔を見て、ニードはたじたじである。

二人の関係上が一目で分かる光景だった。

「よ、よおリック。別に……こいつにこの村のルールを教えてただけだ。おい、行くぞっ」

リックの登場に狼狽えたニード達は、そそくさと逃げ去って行った。ほっと息をついたリタは、その場を救ってくれたリックに礼を言った。

「リック、ありがとう。お陰で助かつちやった」

「ふふ、どういたしまして。でもリタ、あなたももう少し言い返した方がいいわ。ニードも、そんな悪い人じゃないんだけどね……」

そう懸念してリックは言うが、リタが首を縦に振ることはなかった。前述のとおり、この村で騒ぎは起こしたくない。

天使界からウオル口村に落ちてきたリタは、傷だらけだった。

今はリックの介抱のお陰でやっと元気になって、今では走り回れるほどののだが。

「さぁリタ、早く家に入りましょう？ まだ傷が治ったばかりなんだから安静にしてなきゃ」

「リツカ……私、傷はもう大丈夫だよ！」

天使は人間より傷の治りが早い。よって、落ちた際の傷はすっかり癒えてしまったのだが……。

「駄目よ、それに昨日風邪を引いて治ったばかりでしょ！ 今日もしっかり休まなきゃダメよー！」

「リツカ〜」

リツカはリタの手を引っ張り、自分の家へと強制連行した。

（本当に大丈夫なんだけどなー……）

リツカは基本的に優しいが、病人に対してはかなり手厳しかった。リツカの家で療養して早一週間。リタは、まだ一度もこのウォルロ村から出ることが出来ずにいた。

（天使界の皆は元気かな……）

目覚めてから、ずっと心配していたこと。

念願の女神の果実が宿ったと言うのに……自分は地上に落とされ、果実はそこかしこにばらまかれてしまった。

（長老様、イザヤールお師匠……）

長老・オムイと師匠であるイザヤールの顔を思い浮かべる。

(……私は、大丈夫。とにかく今は何をすべきか考えないと)

決意を秘め、リタは今夜、ウォル口村からの脱出を試みることにした。

(とりあえず、何かお礼に残していかないといくらなんでも失礼だよね……。ってわたし、一文無しじゃん!!)

そして、そこには意外な展開が待っていたのだ。

夜もすがら。

窓枠に手を掛け、よじ登る。リタは宛がわれた二階の部屋から脱出を試みた。

「い、意外と高いかも……」

たかが二階、されど二階。自分の身長のは三倍はあるのではないかという高さだ。

しかし、ここで引き返すことは出来ない。

(ごめんねリッカ……)

恩人に黙って抜け出してしまうことになってしまった。

（お礼も何も言わないまま出ていくなんて……不良だ。いや、一応置き手紙は置いてきたけれど！）

天罰を受けるかもしれない。

天罰と言えば、つい最近ニードにちょっとした天罰を食らわせたことを思い出した。

「すみません、お師匠っ！ リタは不良になります……！！」

窓枠を蹴るように外へ飛び込んだ。

「うわわっ?!」

ドスン。

そんな音と共にリタは地面に叩きつけられた。

「いったあ〜」

「……お前、何やってんだ？」

「……………ニード、さん」

村長の息子、ニードだった。

「ニードさんこそ、何を？」

「いや、ちょっとな……そうだ、丁度良い。お前ちょっとこっち来

いよ」

ニードは建物の影に来るようと手招きをした。とりあえず、脱走がバレるわけにもいかないので大人しく建物の影に隠れた。

「なんですか？ ……言っておきますけど私、ちゃんと旅芸人です」

「違えよ、その話じゃねえ」

「あれ、そうなの？ じゃあ服のセンス？ これは着用の義務があるから着ているだけで、私は別に……」

「だから違ええーっ！ お前、何気に昨日のこと根に持つてるだろ！！ そうじゃなくて……」

「こ、声大きいよニードさん！」

今はまだ明け方。リツカだけでなく皆が寝ている。はっとして口を押さえたニードだったが、気を取り直してリタに話を持ち掛けた。

「峠の土砂崩れを何とかしたい？」

体の至るところにくつついていた葉っぱを払いながらニードに向き合った。

ニード曰く、その東の道にある土砂崩れを退かして親父に一泡吹かせたいのだとか。

「リタ、認められたいんだからな。一泡吹かせたい訳じゃねえから」

「どっちでも同じなんじゃない？」

「……まあな。だけど今、外は魔物がうようよしている。そこでダリタ、旅芸人つてのは結構腕が立つんだろ？ だから俺と一緒に来んねーかな？」

ニードの提案に、しばらく考え込んだ。

リツカの家からの脱走計画は、ニードに見つけた時点で、ほぼ失敗に終わっている。

だったら別に頼まれても良いかな、と思うわけで。

「しょうがないな……その話、乗った！」

「そうか！ なら早速、」

「でもちよつと待って、今は魔物の活動が活発になるころだよね」

早朝は、エサを求めて動き回る時間帯だ。それに魔物は空腹な為、気性が荒くなっている可能性もある。

「わざわざそんな時に行かなくてもいいんじゃない……。まあエサになりたいっていうなら別だけど」

「俺にそんな自殺願望は無い」

「じゃあ、日が昇った日中に行くことにしましょう。……よつこら
しよ」

「何やってんだ？」

ニードが怪訝な顔をする。それにリタは笑顔でもって答えた。

「私窓から出てきたから……ここをよじ登らないと帰れないんです
！」

玄関から堂々と帰ったら、家出しようとしたのがバレる上、怒られてしまうだろう。もちろん、リツカに。

開いた窓を示すと、ニードの顔がア然とした顔に変化した。

しかもリタは見たところピンピンしているし、無傷だ。かすり傷さえ見当たらない。

「お前……本当に人間か？」

いいえ、守護天使です……とは、さすがに言えなかったけれど。

「準備は良いか？」

「当たり前！」

「……じゃあ行くか」

ニードが「こいつ、だんだん敬語を使わなくなってきたな……」と内心思いながらも村を出ようとした時だった。

「あれ？ 二人とも、どっか行くの？」

やけに幼い男の子の声が二人を引き留めた。

そこにいたのは、まだまだあどけない村の少年。……二ードに軽い天罰を願ったあの少年である。

「うん、ちよつとあそこまでね」

リタが東の方角を指差すと、その小さな男の子は「あっ」と声を上げた。

「そういえば僕、あっちの方に何か光るモノが落ちてくの見たんだ」

「「光？」」

流星星か何かだろうか。最初はそう考えたリタだったが、男の子の次の言葉によってどうやら違うらしいことが分かった。

「地震の時に落ちこちてたんだ。でも誰に言っても信じてくれないんだよね。ねえ、兄ちゃん達で見てこれない？」

これに対する二人の反応は、正反対だった。

「はあ？ お前それ、流れ星とでも見間違えたんじゃない……」

「分かった、任せといて!!」

「……マジかよ、お前」

大きく胸を張るリタに、げんなりとした顔を向けるニード。

「お前……簡単に安請け合いですんなよ……」

「だって気にならない？　もしかしたら……」

地震と同時ということは、天使界から落ちてきたモノかもしれない……そう言いかけ、慌てて口をつぐんだ。

（あ、危ない……）

うっかり口を滑らせるところだった。

「もしかしたら……何だよ？」

ニードと男の子は、いきなり黙り込んだリタを見て首を傾げた。

「も、もしかしたら……流れ星が落ちたのかもしれないでしょ！　なんちゃってあはは〜」

その場は何とか適当にごまかしたが、リタが意気込むのには理由があった。

（天使界に、帰れるかもしれない……）

帰れなくとも、天使界の誰かと遭遇する可能性は高い。

「よし、行こうニードさん！　出発だあ！！」

「なんでそんなに張り切ってたよ、お前……」

この話を持ち掛けた本人よりも張り切りながら、リタは東の峠への道を進んだ。

「そっぴゃお前、リツカには何て言ってきたんだよ」

昨日まで、過保護と言っても過言ではないくらいリタの世話を焼いていたリツカを見ていたニードは、外出許可が出たことに疑問を持っていた。

だから、そのワケを聞いてみたのだが……

「うん、最初は渋ってたんだけどね……。なかなか引き下がってもらえなかったから、“ニードとデートだよ”って言ったなら何も言わなくなっちゃったんだよね」

もちろん、ニードのリツカへの好意を知った上での発言であった。

「……勘弁してくれよ」

「あはは、昨日の仕返しだよ」

「やっぱり昨日の出来事を根に持っていたんじゃないかよ！」

実は、そのことについてはあまり怒ってはいないのだが、手っ取り早く外出するにはこうするのが一番だと思ったのだ。

「うーん、それにしても結構森ばかりなんだねー」

「田舎なめんなよ。セントシユタイン城へなんか、今じゃ峠の道を使わなきゃ行き来出来ないんだからな!!」

それ、偉そうに言えるものではない……そう思っるのはリタだけだろうか。

「じゃあ、尚更あの土砂崩れをどうにかしないと」

「そうなんだよ、何とかしねえと……って」

ニードの動きがピタリと止まった。

「リタ、早速魔物だ」

「魔物って、あれ……」

モーモンだった。

「なに、あれを倒せって言っの?」

指差すリタの手は少し……いや、かなり震えていた。

「あんな可愛いのに……!!」

見た目も動きもふわふわしているモーモンを倒すのは、ある意味難しそうだ。

「いや可愛いって、おま……」

「こっちおいで〜」

「何引き寄せてんだよ?! ってマジで来たし!!」

モーモンは、ふよふよと飛びながらリタの元へやって来た。

「ほらー、全然大丈夫じゃん」

「な、なんだ……。まったく驚かせるなよな」

モーモンを撫でるリタを見て安心したからか、若干及び腰なニードがモーモンへ一歩近付いた……。次の瞬間。

『シャツッ!』

モーモンは、ニードに威嚇した。

「うわっ……」

「……やっぱ、あんまり大丈夫でもないみたいだね」

リタには大人しいが、ニードには狂暴なモーモンだった。

「なんだよ、こいつ！ 見た目可愛くても性格は最悪じゃねえか！」

『シャツッ！！』

またもやモーモンはニードに威嚇した。

「こいつ、俺の言ってること分かんのか？！ つーか、威嚇してる時のこいつの顔マジで恐え！！」

牙剥き出しのモーモンは元の造りが可愛いだけあってか、恐さ百倍だった。

「言ってることは分からなくても、自分の悪口を言われているくらいは分かるんじゃないかなあ……」

憶測に過ぎないけれど。

その後も、遭遇したモーモン達はなぜかニードを威嚇し続けたのだとか。

「よつやく、着いたな……！！」

やっと峠へ到着した。と言ってもリタはピンピンしていたのだが……

「ニードさん、大丈夫……?」

「お前は大丈夫そうに見えるか、これが? くそ…… モーモンなんて大っ嫌いだ!」

(主に) モーモンから威嚇という名の襲撃を喰らったニードは、すでに疲労困憊な状態だった。

(それにしても……)

目の前に広がる二股の道。

ちょうど真ん中に、天の箱舟を見つけた。

(箱舟…… 男の子が言った“大きな光るモノ”って箱舟のことかな)

中に誰かいたりするだろうか……。

(でも何の気配もしないんだよなー)

でもなー、と考え込んでいたその時。

「、……い……おい、リタ!」

「えっ……あ、はい?!」

深く考えていたせいで、ニードの呼び声が聞こえていなかったらし

い。

「何ポケーツとしてんだよ。木が倒れてるだけだろ、そんなに面白いかな？」

「…………え？」

そう言われて、ハツとした。

(そっか、人間には見えないんだっ)

天使である自分は、人間にも見えないモノも見える。これからは、そうだったことも隠していかないとなのかと思うと、少し気が重くなった。

「そ、そうですね！ 面白いかも！！ あははー……………多分。ニードさん、先行ってていいですよ？」

少し挙動不審になったが、幸いニードはそれに気付かず「変なヤツだな」と呟きながらも土砂崩れ現場へと向かった。

「…………さて、中には誰かいるのかな？」

天の箱舟は運転席らしき部分しか無かった。他の車両はバラバラに飛ばされてしまったらしい。試しに入り口らしき扉をノックした。

コンコン…………

「返事がない……………」

ただの屍のようだ、と続けたいところだが、あいにくリタにそんな余裕は無かった。

「ええっ、それは困る！　お願い誰かいて失礼しまーす！！」

扉に手を掛け、グツと力を入れる。

だが……

「~~~~っ！　あ、開かない?!」

これは結構シヨックだった。

「何さ！　天の箱舟が盗まれるなんて、そんなこと天文学的数値並に稀なんだから、ここまでセキュリティ万全にする必要無いじゃん！！」

そっという問題では無い。

「……しょうがない、他の方法を探すしか無いかな」

がっくり肩を落とし、遙か上空の天使界を仰いだ。

そんなリタを影から見つめる存在がいるとは気付かずに……。

「ニードさん！　土砂崩れの方、どう……ですか」

崩れ具合を尋ねかけたリタは、それを見てうつと言葉を詰まらせた。そこには、巨大な壁のように高くそびえ立つ木や岩や土。

「土砂崩れって、これかよ？ 正直ナメてたぜ……。こんなの、どうにもなんねーじゃんか！」

ニードは思わず土砂崩れに八つ当たりをした。ガラリ、と瓦礫が転がり落ちる。

すると同時に、向こう側から声が聞こえてきた。

「おーい、誰かそこにいるのかーっ！？ いるなら返事してくれー！」

若い男の声だ。

もしかしたら……

(助けに来てくれた人かもしれない！)

「おーい、ここにいるぞお！ ウォル口村のイケメン、ニード様はここだぞーっー！」

……………イケメン？ しかも、自分で言っちゃったのか。

しかしリタは、ニードの言葉を敢えて聞き流すことにした。それは兵士も同じらしい。

「やはりウォル口村の者か！ 私達はセントシュタイン城に仕える兵士だ。王様の命令で、土砂の撤去を命じられてやってきたのだ」

ニードは肩を竦め、兵士には聞こえないくらいの声でぼやいた。

「なーんだ、俺達が頑張らなくても大丈夫みたいだな。これを持ち帰るだけで俺は村の英雄みたいなの？」

「そんな世の中甘くないよ、ニードさん」

そんなリタの忠告をニードは黙殺した。引き続き、土砂の向こうから兵士の声が聞こえてきた。

「ニードと言ったか、このことをウォル口村に伝えてはくれまいか？」

「分かった、確かに伝えておくよ!!」

胸を張って答え、有頂天のニードは足早にその場を離れようとしていた。

「それから、もう一つ確認したいことがある。地震の後、ウォル口村へ向かったルイーダという貴婦人を知らないか。村へ行く途中にあるキサゴナ遺跡へ向かったまま消息が知れないのだ」

「キサゴナ遺跡……？」

そういえば、ここへ来る途中に“キサゴナ遺跡”と書かれた看板があつたような気がする。

その遺跡に一人の女の人が単身で乗り込んで行ったらしい。

「キサゴナ遺跡って……魔物が出て危ないところじゃねえか」

そうばやくニードだったが、結局はその頼みも了承した。

「よし、こうなったら長居は無用だ。急いで村に戻るぞ！」

言ったが早いのか、ニードは物凄い勢いで歩き始めた。

「ちょ……ニードさん、速いよ！ 速いですってばあー！」

しかし、この後ニードは飛ばし過ぎたお陰で早くもスタミナ切れになってしまったのだった。

リタとニードの二人は、ウォル口村に帰ると事の次第を村長に知らせた。

そこにはなぜか……

「リツカ！ なんでここにいんだ？！」

そう、リツカがいたわけで。

「なんでって……あんたがリタを連れ出したりするからでしょう！
しかも、デートだとか何とか！」

「それは誤解だリツカ！」

「ご、ごめんリツカ。実はデートとかじゃなかったりして……」

「あら、そうなの？ 心配しちゃったじゃない。リタに悪い虫でも付いたらいけないもの」

「……………うん、ありがとう」

申し訳なさ八割、ニードへの同情その他諸々二割で、なんだか複雑な心境なリタだった。

(ニードさん、報われる日がきつと来ますよ……………多分)

確信は全然持てないのだが。

「最近は何物が多いから村の外に出るなどあれほど言ったではないか、馬鹿者が……！」

村長……………つまりニードの父親の大声が室内に響いた。ニードも負けじと言い返す。

「でも、俺とリタが行かなかつたら土砂崩れのことからなかったらだろ？」

「別に知らなかったところで、道が繋がればおのずと分かったことだ！」

痛いところを突かれたニードは黙る他なかった。
その様子を眺めてから、リタはリツカの方をそろりと向いた。

「リツカ、ホントにごめんね……?」

「ううん、もういいよ。ケガもないみたいだし。それにしても、ルイダさんって……その話、本当なの？ わたし、その人知ってるかもしれない。確か、お父さんの知り合いにそんな名前の人がいたの。もしかしてルイダさん、お父さんが亡くなったの知らなくて会いに来たんじゃ……?」

その可能性は十分にあった。

「そつか、知らないままウオル口村……というかキサゴナ遺跡に向かっているのかも……」

「えっ、キサゴナ遺跡に……?!」

(ニードへの) 村長の説教をBGMに、リタとリツカはルイダの消息についての憶測を展開していた。

「お前ら、そんなことより助けしてくれよ……!」

ニードの切実な願いが聞こえてきたのは、そんな時だった。

「……あ、」

「リタお前…… “あ、” じゃねえだろがっ!」

「ニード、話は最後まで聞け!!」

このやり取りのせいでニードの説教時間が長引いてしまったのは自業自得というか、なんというか……。

時は経ち、翌朝。

「……リツカ、わたしキサゴナ遺跡に行ってくる」

朝食を食べ終わると、リタはテーブルの向かいにいるリツカにそう告げた。

「ダメよ、危ないでしょ！ それに病み上がりなんだから……」

案の定、リツカは反対した。

かしリタも引かない。

「ちゃんと峠にも行けたんだから大丈夫だよ！ それにリツカ、ルイーダさんのこと気になるんでしょ？」

ルイーダは依然としてウォル口村に訪れていなかった。リツカは、父の知り合いかもしれないその女性のことを、ずっと気にしていたのだった。

「なんじゃ。昨日からずっとボーンとしてると思ったら……そういうことだったのか」

横から口を開いたのは、リツカと共に暮らすリツカの祖父だ。チャンス、とばかりにリタは畳み掛ける。

「そうなんだよ、おじいさん！ ルイードさんのことが心配だし……お願い！！ いいでしょ？」

根負けしたリツカは、ふう……と溜息をついた。

「……分かった。でも、無理はしないでね」

「ありがとうっ！！ じゃあ早速準備して行ってくる！」

喜々としてリツカにお礼を言った後、食器を片付けて足早に外へ出た。

「あ……そうだ、ニードさんも誘った方がいいのかな？」

あの村長の息子は、リツカの為なら何でもやりそうだ。

(一応、様子を見に行こうかな)

そう思い、村長の家の前までやって来たのだが……

「怒鳴り声が聞こえる……」

何を言っているのかはサツパリだが、とにかく村長の怒鳴り声やたらと聞こえてきた。

「もしかして、まだ昨日のことを怒られたりとか……いや、まさかね〜」

だが、そのまさかだったりする。

「……今日は一人で行く」と

早々にニードを誘うことを諦めたり夕は、キサゴナ遺跡へと足を進めるのだった。

「ここが、キサゴナ遺跡……」

とても古い建物だった。

こんなところに、人なんてくるのだろうか……。

しかし、件のルイーダはここに寄ったらしいのだから、中に入って確かめなければならなかった。

(……やっぱ、ニードさん連れて来れば良かったかも)

今更に後悔の念が湧いて来た。

だが、ここでウォル口村へ戻るのは遠慮したい。

(もしかしたらルイーダさんがいるかもしれないのに、こんなところで引き返すせない……!!)

そういうわけで、村に戻るつもりはさらさら無いリタなのであった。遺跡は、六角形の部屋を繋げ合わせた構造だった。

さすが遺跡と言うだけあって建物の中は辺りが暗く、あらゆるところが老朽化している。

人がいるのかどうかも疑わしい。

リタは暗いせいで物に足を取られたり、床が崩れかけたりと、この中に入ってからロクなことが無かった。

「ルイーダさん、本当にこんなところに寄ったのかな……」

大分、奥地へと入り込んだのではなからうか。

「やっぱ、いないかなあ」

諦めかけたその時。

「誰かそこにいるのかしら？」

女の人の、声がした。

「あらビックリ！ こんなところで人に会っなんて珍しいこともあるのね」

「もしかして……ルイーダさん?!」

「どうして私の名前を……」

薄暗い闇の中、声のする方へと駆け寄ると瓦礫に足を取られた女の
人を見つけた。

「大丈夫ですか?!」

「大丈夫! と言いたいところだけど……残念ながらあまり大丈夫
と言えないわ。ねえあなた、その瓦礫を退けて下さらない?」

「あ、はいっ!」

ケガは大したことないんだけど足を挟まれちゃって動けないのよね
ー、とぼやくルイーダ。急いで瓦礫の山を崩そうと奮闘し始めたり
タだったが……

どこからともなく、地響きが鳴りはじめた。

「何、この音……」

「ヤツよ、ヤツが来たわ……!」

“ヤツ”という言葉に首を傾げたりタだったが、ルイーダの視線の先を見て硬直した。

「アイツから逃げようとして落ちてきた瓦礫に挟まれたの。頭上にも気をつけてちょうだい！」

やたらと大きいシルエットが浮かんでいる。それはだんだんと自分達の方に近付きつつあり、数メートルの距離になった時、その全貌を明かした。

その正体は、鋭く大きい角が特徴的な全身毛むくじやらの怪物・ブルドーガ。

「い、猪っ?!」

角が生えているけれども。見た感じは猪のようだった。

(早くルイーダさんの瓦礫を退けないと……!!)

焦っているからか……なかなか作業は、はかどらない。

「あなた、私のことはもう良いわ、早く逃げなさい！」

「いやですー!! 逃げる時は一緒に逃げます!!」

怪物は、一步また一步とリタ達に近付きつつあった。

これではもう、二人揃って逃げられそうもない。

そう判断したリタは、ルイーダと怪物・ブルドーガの間に立ちはだ

かった。

「何を……!!」

目を見張るルイダ。

「駄目よ！ はやく、あなただけでも……」

「ここを出る時は、ルイダさんも一緒です!!」

リタの右手には、剣が握られていた。

それは、リツカの家から出てきた剣だった。

処分に困っていたらしいので、くれないかと言ったところアッサリとOKを貰ったものだ。

『でも……とても古い剣だから、使えるか分からないよ?』

ウォル口村近辺に出没する小物モンスターには、おあつらえなのが……リツカの言う通り、とても古い剣なので、こんな巨大モンスターに通用するのかが分からなかった。

(わたし、とても無謀なことしてるような気が……)

自覚はある。

それに、リタはもともと剣の使い手ではないのだ。

「でも、負ける訳にはいかない!!」

鞘を投げ捨て、ブルドーガへと立ち向かった。
相手が突進してくるのを避けつつ、後ろ脚に切り付ける。剣が古い
だけあって、つけることの出来た傷は浅かった。

「やっぱり……」

ここは、四肢を狙って動きを封じるしかない。
次は前脚に狙いを定め、猛進してくるブルドーガを待ち構えた。

そして一歩踏み出した、その時。

「うわっ……?!」

目の前に瓦礫が降ってきて、思わず立ち止まった。
しかも、ブルドーガは相変わらずこちらへ向かって来ている。

(やば……)

来るだろう怪物に身構え、目をつぶると。

衝撃と浮遊感に襲われた。

そしてその直後、背中に壁を感じ、突き飛ばされたことが分かった。

「うっ……」

あまりにも大きな衝撃にむせそうになる。痛む体を我慢して立ち上
がり、目を開いた。結構な距離を飛ばされたらしい。

手元にある剣を、しっかりと握りしめた。

(わたし達は、二人でウォル口村に帰る……!!)

そう思うと、力が湧いてくるのを感じた。

「……はああっ!!」

後ろ向きのブルドーガへ向かって突進し、高く跳躍すると一閃した。同時に、巨体がくずおれるように倒れる。

「た、倒せた？」

横たわる巨体は、言わずもがなブルドーガのもので。

「良かったあ……」

一安心したりタは、そのまま意識を手放した。

「ん……あれ？」

まず初めに草の匂いがした。

「ここは?!」

ガバツと身を起こす。目の前にはさっきまで中にいた遺跡が佇んでいた。

「あら、やっと起きたのね？」

すぐ隣には、ルイーダがいた。

「ルイーダ、さん……?」

「その後、ドサクサでうまく足が抜けたから外に出てきたのよ」

つまり、リタを抱えて遺跡を脱出した……と。
そういうことらしかつた。

「それにしても……あなた、見かけによらず強いのね。おかげで助かったわ。名前は何というの?」

「リタです」

「リタ、ね。もしかして……あなたウォル口村から来たんでしょ。知ってたみただけけれど、私はルイーダ。セントシュタインで酒場をしているワケアリの女よ」

「酒場……ですか」

酒場……リタには全く縁の無い場所である。

「酒場って言っても少し特殊な店なんですけどね。……さて、わたしはウォル口村へ向かうことにするわね。あなたはもう少し休んでから来なさい。お礼はあらためて。アデュー！」

「ええっ、ルイーダさん?!」

引き留める間も無く、ルイーダは颯爽と去って行った。

「……行っちゃった」

しばらくの間、リタは去って行く後ろ姿を呆然と見送ったのであった。

リタがウォル口村に着いたのは、日の沈みかけた夕方頃のことだった。

「わ……すっかり暗くなっちゃった」

辺りはすっかり暗く、星が瞬き始めている。早く帰らなければ、リツカが心配してしまう。

まあ……現在進行形で心配しているかもしれないが。

(でも、もしかしたらルイーダさんに話を聞いてるかもしれないし……)

そうであることを祈る。

ウォル口村の門をくぐり、一目散にリツカの家へと向かった。すると、家の周りをさま迷う一人の幽霊を発見した。

「あれ……?」

困ったようにうつろつく男性の幽霊。その様子から何かあったらしいことが伺える。

「どうかしたんですか?」

「うひゃうっ!」

声をかけるとその男性は肩を揺らせて驚いた。そして後ろを振り返る。

「ビックリしたなあ。驚かせないで下さいよ……ってあなた、私が見えるんですか!? 私はとっくに死んでるんですよ?!」

「ああはい……わたし、この村の守護天使ですから!」

言い切ってから、自分の格好を思い出した。

天使の象徴である羽と光輪が無い上、不思議な服を着ている。自分は天使だと信じてもらえるのだろうか……。

「えっと……ちょっとした事情があって、今はこんな姿なんだけど……」

「守護天使様?! そうでしたか。どうりで私が見えるわけだ……」
どうやら納得してくれたらしい。普通の人間には幽霊は見えないので、それであっさりと理解してくれたみたいだ。

「そうだ、自己紹介がまだでしたな。私はリベルトと申します」「

「リベルト……?」

最近、どこかで聞いたことがある気がする。どこで聞いたのだったか……。

(……思い出したっ!)

ここに落ちてきたばかりの時、その名前を聞いたことがあった。

「リツカの……お父様?!」

「そこ、ちょっと待ったあー!」

直後、ピンク色の光がリタの後頭部に激突した。

「いったあゝい」

ピンク色の光の正体は……妖精のような羽を持つ、どうみてもギャルみたいな格好をしたモノだった。

「ちょっとお、ポケットとしてないで上手くかわしなさいよう！」

無茶をおっしやる。

驚いて咄嗟に声が出ないリタをじっと見つめ、そうしてからようやく妖精らしきモノは口を開いた。

「アンタと……あとオツサン、今天使とか言ってたよね？ あたしもそう思ったケド……いまいち確信が持てないのよネ。アンタ、ワツカも翼も無いのよ？」

外見を裏切らない喋り方をする、それを見て呆気にとられながらもリタはとりあえず気になっていることを聞いてみた。

「えつと……妖精？」

妖精は普通、こんなギャルみたいな姿をしているだろうか？

「んー、妖精ってゆーかぁ……」

間を置いて、妖精らしきモノはリタ達の前で決めポーズを決めてみせた。

「聞いて驚けっ！ あたしは謎の乙女サンディ、あの天の箱舟の運転士よっ！！」

ちなみに“乙女”と書いて“ギャル”と読むらしい……。

「えええ〜〜〜っ?!」

リタは素直に驚いた。

「天の箱舟って……あの天の箱舟?!」

「それ以外に何があるっていうのヨ……」

驚いた、この小さいギャルみたいな子 サンディが運転していたとは。

「サンディが謎なら、箱舟も謎だわ……」

「ちょっとアンタ、失礼なこと言わないでくんない?!」

「あの一……」

自分で謎の乙女って言ったのに……と思っていると、すっかり場の空気に飲み込まれてしまっていたリベルトが遠慮がちに声をかけた。

「あ、ごめんなさいリベルトさん」

「てゆうかさ……どう見ても人間なのに天の箱舟や魂は見えるって、あんた一体何者？」

天使だと認めてくれないサンディに、リタは一生懸命訴えた。

「だから守護天使ですってばあ！ 地震が起きた時、天使界から落ちちゃって気付いたら羽根もわっかも無くなってたんです……」

「ふーん、そうだったんだ。なーんか信じられないんですけど……
そうだった」

サンディは何か思い付いたらしく、リベルトを指差し、こう提案した。

「それなら、このオッサンを昇天させてみなさいよ。それが出来てこそその天使っしょ！ それが出来たら天の箱舟に乗せてあげてもいいわ」

「ホントに?!」

リタの目が輝くのを見て、サンディは「ホント、ホント」と上機嫌に頷いた。

「リベルトさんっ」

この時のリタの顔は、それはそれは輝いていたのだとか。

『未練……ですか？ そうだ、宿屋の裏の高台に埋めたものがあるんですが、それかもしれません。掘り出してはくれませんか？』

それが、リベルトの昇天しない理由らしかった。

「じゃあ、わたしそれ取ってきますー！」

リタは茂みの中をガサガサとまさぐった。サンディには、頼んでカントラを持ってもらっていた。面倒だと文句を垂れたがこれが無いと作業がはかどらないことは分かっているらしい。文句を言いつつも、ちゃんと手元を照らしてくれていた。

それにしても、探し物がなんなのかは分からないが……。すると、昔に土が掘り起こされているような痕跡を見つけた。そこだけは草で覆われていなかった。

「あ、確か……掘り出すって言ってたっけ」

試しに、古ぼけた銅の剣を使って掘ってみる。使い方が間違っている、というサンディの言葉はこの際無視である。すると……

「……トロフィー？」

なんと、金ぴかのトロフィーが発掘された。

リベルトのところへトロフィーを持って行くと、リベルトの顔はたちまちにほころんだ。

「おおっ！　そうです、これこそ宿王のトロフィー！」

トロフィーを見るリベルトは、なんだか懐かしそうだった。

「実はずっと封印していたんですよ、リッカのために、セントシュタインへの思いを断ち切るために……」

「リベルトさん、宿王って……宿の王様なんですか？！」

「ええ、まあ……そういうことになりますかね」

「すごいですっー！」

リベルトは、リタの称賛の言葉に照れたように頭を掻いた。
金ぴかのトロフィーは、存在を主張するかのようキラキラと輝いている。

(……そうだった)

「リベルトさん、これ少し借りていいですか？」

「いいですよ。でも何に使うのですか？」

リタはトロフィーをリベルトに少し貸してもらい、リッカの家へと入ろうとした。

(リッカに見せたらビックリするかな……?)

父親の遺品を見たら喜んでくれるだろう、そう思い戸を開こうとした、が。

「あれ……人がいない？」

リツカの祖父でさえいなかった。

（宿の方かなあ……）

ウォル口村に一つしかない宿へ顔を向けると、明かりが灯っているのが見えた。

（今日に限って皆あっちにいるなんて、どうかしたのかな）

不思議に思いながら宿の戸を開ける。

そこにはリツカや祖父の他に、客であるリーダーの姿があった。

「わたし、セントシュタインには行きませんか！」

しかも、入ると同時にリツカの声がした。

「どうしたの、リツカ……？」

キョトンとして戸の脇に突っ立っていると、それに気付いたリツカが出迎えに来てくれた。

「おかえりなさいリタ、遅かったじゃない！ ……あら、このトロフィーは？」

戸の陰にあったトロフィーを明かりに照らすと、さらにトロフィーは輝いて見えた。

「これは……宿王のトロフィー！ しかもお父さんの！ どうして……」

困惑するリツカに、今まで黙っていたリツカの祖父が椅子から立ち上がった。

「そのことについては、ワシから話そう」

「……おじいちゃん」

それから、祖父はリベルトのことについて語った。

リツカの父は宿王だったこと、リツカは病弱でそのためにウォルロ村に越してきたこと。宿王の称号よりもリツカが大切だったということ。

「この村に来てからも、リベルトの宿への熱意は変わらなかった……」

それは、お前もよく分かっているだろう……？

「お父さん……。わたし、小さい頃から気になってたの。お父さんの遠くを見るような視線……。お父さん、セントシュタインの宿のことを忘れられなかったのね」

しばらく下を向いて考え込んでいたリツカだったが、やがて決心したように顔を上げ前を向いた。

「何が出来るか分からないけど……。おじいちゃん、リタ、わたし……ルイーダさんの申し出を引き受けてみるよ！」

ついにリツカが決心をし、祖父はそれが良いと後押ししてくれた。

『まさかリツカが私の夢を継いでくれるなんて、あの子も大きくなつたものです。もう思い残すことはありません……。』

リベルトの体が淡い光を放ち始めた。

『ああ、どうやらお別れのようですね。ありがとございます、ウオル口村の守護天使様……。』

リベルトは穏やかに笑い、そしてスッと消えて行った。

(リベルトさん……。どうか安らかに眠って下さい)

次の日、リツカはセントシュタインへと旅立つこととなった。

数日後……。土砂崩れは取り除かれ、峠の道は開通した。
そして、リツカがセントシュタインへと旅立つ日。

「離れ離れになっちゃうけど……元気でね、おじいちゃん！」

「都会暮らしは慣れんだろうが、くれぐれも身体を壊さぬようにな。ルイーダさん、よろしく頼みますぞ」

「はい、お任せ下さい」

ルイーダが頷き、リツカは祖父に笑顔を向けた後、リタを振り返った。

「リタ、あなたにはすっごくお世話になっちゃった。本当にありがとう。お父さんのトロフィーを見つけてきちゃうなんて、不思議な人ね。もしかしてリタ、本当は天使様だったりして」

「へっ?!」

「……なぐんてね！もし途中でセントシュタインに寄ることがあったら絶対宿屋にも寄って行ってね！」

実は天使というのは真実なのだが……。冗談だったことに安心しながらリタはそれらに笑顔で応じた。

「あ、ありがとうリツカ。その時は喜んで寄らせてもらおう！」

そして、リツカは少し距離を置くニードにも声をかけた。

「この村の宿、ニードが継いでくれるんでしょう？勝手な話だけど、わたしあの宿を閉じたくなかったから……ありがとう！」

「親父が働けってるさいからな。俺がやるからには、セントシユ
タインよりビッグな宿にしてやるよ!」

何だかんだ言いながら、ニードも結局はリツカを送り出してくれた。

「それじゃ行ってきます! 皆、今までありがとう!」

そしてリツカ達は、旅立っていった。

第二章 王都と謎の黒騎士（前編）

「よし、じゃ入るよ」

リタ達はウォル口村を出て、今は天の箱舟の前にいた。

（箱舟に乗るなんて初めて……）

多少緊張しながらサンデイが開いた扉から中へ入ると……

「うわぁ……」

「これが箱舟の中よ。どう？ なかなかイケてんでしょ」

内装は全て金ぴかだった。口が開いたまま閉まらない。しかし、見慣れているサンデイは何事も無いように喋り続ける。

「でも出来ることなら、もっとカワイク派手にしたいのよねー。まだちょっと地味じゃない？」

「充分派手だと思うけど……」

この金ぴかの世界にこれ以上何を装飾しようと言っのだろうか。

「……なによー、さっさと出発しろって言うの？ 分かったわよ、ええ、やってやりマスよ！！ ぶっちゃけアタシも天使界がどうなったのか知りたいっばいしね！」

誰もそんなことは言っていないのだが……半ばやけくそに言い放ったサンディは、箱舟の運転席にあるボタンを押そうとしていた。

「それじゃ行くよー。す、す、す、スイッチ・オンヌツ！」

「なにそれっ?!」

サンディは思い切りボタンを押すが……箱舟は何の反応も示さなかった。

(え、うそ……)

「……やっぱりダメなんですけど。あたし的には天使を乗せれば動き出すって思ったのに。なんでかなあ……」

「えっ、わたしのせい?!」

自分せいという訳ではないはずなのだが……なんだか申し訳ない気持ちになってしまったリタだった。

そこで、サンデイが「あ、」と声を漏らし後ろを振り向いた。そこには当然リタがいるわけで。

「あんた天使のくせに星のオーラ見えなかったよネ? ……それってヤバくね?」

「や、やっぱり?」

さすがにリタもこれはまずいと思った。

それは、ちょうどウォル口村を出発する時のことだった。

「あのオッサンを成仏させたことだし、こりゃあんたのこと天使だって認めないわけにはいかないか」

やっと天使だと納得してくれたサンディに安堵の息をつく。このまま天使と認めてくれなかったらどうなっていたことか。

「約束通り、天の箱舟に乗せて天使界まで送ってつてあげるわ」

「やった！　ありがとうサンディ！！」

これでやっと天使界に帰れる……！！
リタは胸を撫で下ろした。

その横で、サンディはふとあることを思い出した。

「ところでさ、あんた……リタだっけ？　天使だったら星のオーラ回収しなくてよかったの？　あそこに転がってたんですケド」

少しの間、沈黙が横たわった。

「……………うそっ？！」

全く見えなかった。そういえば、師匠であるイザヤールが“魂が出すオーラはひととき大きく輝いている”とか言っていたような……。どうやらリタは、その普通よりも光を放つというオーラすら見えなくなってしまうらしい。

「……ええっ!? アンタ、オーラ見えなくなっちゃったの?!」

「そうみたいだねえ……」

サンデイの焦った様子とは対称的に、のんびりとした反応を返したリタだった。

そんなリタにサンデイは脱力感を覚える。

「あ、はは……どうしようかな?」

「……前言テツカイしたいんですケド。あなた、ホントに天使なわけ?」

「それは……だからそれは天使だって、言ってるでしょー?!」

「きつとそのせいなんですケド!」

「ええー……」

断定的なサンディの言葉には否定出来ないところがあるため、反論をするわけにはいかなかった。

「あーあ、これからどうすればいいのよー……とか言ってるんじゃないか。あたしもあんまヒマこいてると神様に怒られるっばいしね。……って、あぁーっっ！ 神様！！」

いきなり大音量で叫ぶものだから、驚いてリタの体が一瞬飛び上がった。

「そうよ神様！ こんなことになってるのにどうして助けてくれないワケ？ おかしいんですけど……もしかして見つけれない？！」

サンディはポンポンと話を進めて行くが、リタはついていくことが出来なかった。

「あー、サンディ？ 神様って……」

「……というわけでリタ、あたしらも道が通じたっていうセントシユタインってところに向かうわヨ」

「どづいつわけ?!」

一人取り残されていたリタは、突拍子もないサンデイの提案に目を丸くするしかない。

というか、セントシュタインへ行けば何か解決案があるのだろうか？

「どづいつわけも何も……ていうか、何その思いっきり疑ってる顔。超ウケる!」

「いや、疑ってはないんだけど……」

ただ単に……不安。

「分かってないわね!。あたし的に、いっぱい人助けをして星のオーラをだせばそれが目印で神様に見つけてもらえると思うワケ。そこんところは分かってる?」

セントシュタインで星のオーラを出しまくって、神様に気付いてもらおうというわけだ。つまり……

「つまり、セントシュタインで人助けをしようってこと?」

「そういつコト。なーんだ、ちゃんと分かってるじゃんね」

星のオーラに神様が気づいて、それで天使界へ帰れるなら……

「そっか、そういつことなら……サンデイ、早速セントシュタインに出発しよう！」

天の箱舟を降りて、セントシュタインへの道を見据える。

「んじゃ、方針も決まったことだし……さあ行くヨーーー！」

サンデイの元気な、はっちやけた声を合図にリタは王都への第一歩を踏みしめた。

セントシュタインへ、出発。

店や家が軒を並べる、セントシュタイン城下町。

「ここが、セントシユタイン……！」

初めて見る城下町に目を輝かせる少女がいた。

「やっとついた感じ？ やっぱ王国は広いね」

サンデイはリタの周りをひらひらと飛び回った。

「あ、そういやリツカとかいう子がここで宿持つんだっけ？
知らない仲じゃないんだし、ちょっと見て行こーよ……あれ、リタ
ちょっと聞いてる?！」

サンデイに怒鳴られ、慌てて耳を手で覆った。耳元で騒いでくれた
おかげで、頭の中がグラグラする……。

「ごめんごめんポーっとして……でも、サンデイは普通の人には
見えないんでしょ？ 普通に喋ってたらわたしが変な人扱いされる
よっな……」

「気付かれない程度に小声でうんとかすんとか言えばいいじゃない
の……」

言われた通り、リタは小声で返した。

「分かったよ！ ええっと、リツカの宿屋は……」

そんなリタに、サンディはやれやれと溜息をついた。

「アンタねー……そんなボサツとしてると、いつか物盗られるよ？」

「盗られないもん。あ、アレかな？」

宿らしき建物を見つけた。ちょうどリツカとルイーダがその建物に入って行くところだ。

「あそこだ！」

宿へ向かおうとした、その時……。

「きゃあぁーっ！！ 引ったくりよー！！」

どこからか女性の悲鳴が聞こえてきた。……どうやら物取りが発生したらしい。

「あーあ、言ってる傍からコレだよ。王都ってこういうトコロがイヤなんだよネー……って、リタ?!」

ぶつくさと愚痴るサンディをよそに、リタは鞘が付いたままの剣を構えた。

「ちょっとアンタ何するつもり?! ……まさか、」

そのまさかだった。

「引ったくり捕まえる」

簡潔にかつキツパリそう言つと、リタはこちらに向かってくる、引ったくりらしき男に照準を合わせた。そして、その前へと踊り出る。

「な……っ?!」

いきなり現れた少女に戸惑った男だったが、そんなことはお構いなしとばかりにリタは高く跳躍した。

剣を握って大きく振りかぶり、男の頭上に一撃を加える。

「盗つ人成敗ーっ！！」

ガツン、という鈍い音がして男が倒れた。
無事地面へと着地すると、リタは男の傍らへ歩み寄った。

「女の人から物を強奪しようなんて感心しないよ？」

完全に伸びてしまった男を覗き込み呟くと、男が盗んだバッグを拾いあげた。
いかにも高そうなバッグを持ち主の手元へ返す。被害者は、全身をきらびやかに着飾った貴婦人だった。

「ありがとうございます……！！」

貴婦人が何度もリタにお礼を言っていると、周りからも称賛の聲が上がった。

その後、やって来た兵士に盗みを働いた男を引き渡し、その兵士にも感謝されたリタだった。

兵士達が去った後、サンディは思いつ切りリタをド突いた。

「うわわっ……」

「やったじゃんリタ！ 一瞬どうなるか超焦ったけどさ、ちゃんと人助け出来たし結果オーライ的な？ この調子でドンドン人助けしてくわヨー！！」

「うん、任せてよ！ じゃ……事件も一段落したことだし、リツカの宿屋に行こっか」

そうしてリタ達は、意気揚々とリツカの宿屋へと向かったのだった。

宿の扉を覗くとそこは……

「ちょっとルイーダ、何考えてんのよ？ この子に宿屋を任せるって……今でさえ危ないのに、あんたここを潰すつもり？」

……修羅場真っ最中だった。

「どっしりおっサンディ、ものすごく入りづらい」

店の中まで聞こえないくらいの小声でサンディに話しかける。が、話しかけられた相手の方はというと結構その状況を楽しんでいた。

「何この険悪なムード。超ウケるんだけど!!」

どこまでもマイペースなサンディに、リタは溜息をつきたくなった。

「サンディ、リツカに会うのはまた後でにしよう」

「えー、いいじゃん面白そうだし。このまま様子を見てようヨ」

「だーめ!!」

むんずとサンディの首根っこを掴み、その場を後にした。

「少しくらいいいじゃん！ リタのケチーっ!!」

街の中、これ以上騒ぐと（自分だけ）変人扱いされるので、そこからサンディの言葉を一切無視したリタだった。

「サンディ……これ、なんだろう？」

「え〜？ なになに………黒騎士あらわる？」

立て札を読んだサンディは首を傾げた。

そこには、正体不明の黒騎士がセントシュタインに現れたこと、その黒騎士を倒してくれる人を探しているということ、それについては素性を問わないことが書かれていた。

「つまりは、王様が黒騎士を倒せる強い人を探してるってワケ？」

サンディが簡潔にまとめると、今度はリタが首を傾げた。

「うーん、黒騎士ってどんなヤツなんだろう……？」

「嬢ちゃん、あの黒騎士を倒しにきたのか？」

声をかけられて振り向くと、体格の良い男性がいた。

「黒騎士を見たことがあるんですか？」

「ああ。全身真っ黒な鎧で覆われててな、不気味ったらありゃしなかったぜ。まったく土砂崩れが一段落したかと思ったら……」

「難去つてまた一難だ、とその男性は肩をすくめた。」

「ああ、そついや地震と黒騎士の事件ってほとんど同時に起こったような気がするな。地震と黒騎士って、なんか関係あるのか……？」

「地震と、黒騎士……」

リタとサンディは、顔を向き合わせた。男性からしてみれば、サンディが見えないために、リタが一人で考え事をしている構図にしか見えないのだが。

「悪い事は言わねえから、やめといた方がいいと思っぜ……」

「ありがと、良いこと聞けました。じゃ、私お城に行ってみるんで……」

「ええっ？ 嬢ちゃん?!」

呆然とする男性に笑顔でお礼を言い、リタはセントシュタイン城へと駆けて行った。

「ふーん、黒騎士ねえ……。この人、みんな黒騎士に困ってるっぼいね。これは人助けのチャンスじゃね?!」

「うん！ サンディ、早速王様に話を聞きに行こうか！」

「ええっお断り?! なんて!」

愕然とするリタに、城の門の前にいた兵士は追い打ちをかけた。

「なんてと言われてもだ……。そのようなりで黒騎士を退治しに来たと言っのかね？」

その言葉に、リタはうっと押し黙った。

ちなみにリタの今の格好は……天使が着る服・タイツ・ブーツの三点セットに、古びた剣（使っていたら更にオンボロになってきた）、そして盾は無し。

準備万端とは程遠い装備である。

しかもそこに、少女であるという事実が相乗効果。

当然、兵士から疑いの目を向けられた。

「素性を問わないと言ったが、さすがに……」

「そこをなんとか!」

懇願したリタだったが、兵士はなかなか城内へ入れてくれなかった。一部始終を見ていたサンディは肩をすくめる。

「リタ、何言ってもムダだって。そんな軽装備じゃさあ……。それに、小柄な女のコが一人で黒騎士退治つても胡散臭い話じゃん」

そう諭すと、リタはがっくりと肩を落とした。

「そんなあ……」

うなだれたリタに兵士だけでなくサンディも戸惑う。

「ま、まあ仕方ないって！ 黒騎士だってまた街に来るかもしんないしさ、とりあえず宿に行こうヨ。そんでもって装備品も買って出直そ……」

そう励まされ、リタはリックカの宿へと足を進めるのだった。

「あ、リタ！ さっそく来てくれたんだ！」

宿の中へ入ると、荷物を抱えたリックカが出迎えてくれた。どうやら先ほどの揉め事は解決したらしい。

「準備の方は進んでるみたいだね、リックカ」

「うん、あとそこの荷物を片付ければ終わりよ」

リックカの示した方向には、あと少しだけ荷物が残っていた。

「……はい、これで終わり。お待ちせ、もうすっかり準備完了よ！宿屋に泊まりたい時は私に話しかけてくれればいいからね」

「うん！ あ、じゃあ今日早速泊まって行くのかな」

その時、ちょうどルイーダが扉を開けて宿の中へと入ってきた。

「あら、来てくれたのねリタ」

「ルイーダさん！」

もう少しで入れ違いになるところだった。

「あ、そういえば遺跡で助けてもらったときのお礼がまだだったわ」

リタの顔を見て思い出したらしい。リタもリタで、「ああ、そういえば……」とお礼のことなどすっかり忘れていた。

「ウフフッ……いいわ。私の仕事ぶり、見せてあげる」

ルイーダは不敵に笑うとカウンターへ向かい、リタもこちらへ来るように促した。

「さて、と……ここはルイーダの酒場。旅人達が仲間を求めて集まる出会いと別れの酒場よ」

「出会いと別れの酒場……？」

初めて聞くことに、リタの頭の中はクエスチョンマークで埋め尽くされていた。

「簡単に言うと、旅の仲間を紹介するところよ。さあ、何かお望みかしら？」

「仲間……」

確かに仲間がいると都合が良さそうだ。現に、ついさっきの兵士とのやり取りの時にサンディが少女の一人旅はおかしいと言っていた。そして、仲間であつたら……

「あの、王様に黒騎士退治の詳しい話を聞くためにお城に行こうとした時、兵士が納得して城の中に通してくれそうな人っていますん

か?!」

「え?」

あまりにも具体的すぎる内容に、一瞬目が点になったルイーダだった。

「あー、だったら男の方が良いかしらね。それなら……」

ルイーダは手元の名簿らしきものに目を通した。そして、ある一点に視線が止まる。

「……そうね。この子だったら……」

「ルイーダさん?」

キョトンとしながらも尋ねると、何か企んでいるような含み笑いを浮かべた。

「実は、その黒騎士……だったかしら? そいつを退治したいって言ってたヤツがいたの思い出したのよ」

「本当ですか?!」

目的が一致しているなら申し分ない。

「ええ、それなりに腕の立つ戦士なんだけれど……あら、丁度良いところに」

ガチャリと扉の開く音がして、中へ誰かが入って来た。

「リタ、こちら今日から新しく仲間になるアルティナよ。二人とも仲良くね」

「……………え？」

「……………は？」

突然宣告されたことに、二人が疑問の声を上げるのは同時のことであつた。

(あれ、結構強制的?)

「じゃ、黒騎士だかなんだか分からないけど、頑張って退治してきてね。」

「ルイーダさん?!」

手を振って送り出そうとしているルイーダ。リタもアルティナと呼ばれた青年も、さすがに待ったをかけた。

「おい！ また勝手に決めんな!!」

(え、“また”って?!)

以前にもこんなことがあったらしい……。

「いいじゃないの。どうせ引き合わせても、ちょっとした乱闘起こして終わるんだから」

引き合わせから乱闘に発展するとは一体何があったのだろうか。

(わたし、この人と上手くやっていけるのかな……)

不安感が拭えない。

「文句言わないの！ リタを見なさい、一言も不満を言わないじゃない！」

(いや、雰囲気的に何も言えなかっただけなんですけど……！！)

しかも、そんなことを言える雰囲気でもない。

「とにかく、お城の王様に話を聞きに行ってみたらどうかしら？」

話を進めるリーダーに、アルティナは折れたらしく、

「分かったよ、つたく……」

舌打ちしそうな勢いで了承した。

「おい、行くぞチビ。さっさと来ないと置いてくからな」

そして、何も言うことが出来ず傍観していたリタにサラッと暴言を吐くと、宿を出て行ってしまった。

「ルイーダさん……なんですか、あの人?!」

アルティナの出て行った扉を指差し、ルイーダに食ってかかる。

「自己中にも程がありますよ……!!」

突っ込みどころ違くないか。と、誰もが思った瞬間。

混乱をきたしたためにチビ発言は聞き流していたリタだった。

また、ルイーダも聞き流すことにしたらしい。

「そうなのよね。アルティナだったら、いつもあの調子だから大概の人と揉めて終わっちゃうのよ」

性格に難あり、と判を押されているアルティナであった。

「リタ、今回だけでも付き合ってやってくれないかしら?」

「うん」

ルイーダの頼みに、仕方なく首を縦に振るリタであった。

これが、一人目の仲間との第一印象が最悪すぎる出会いであった。

リタは現在、武器屋にいた。

「……………これだ！」

リタが手にしているのは、鈍い銀色の光を放つ金属の扇。

「あれ、それにすんの？ てっきり剣でも買うのかと思ってたんですケド」

「んー、私専門は扇なんだよね」

ひよっこりと顔を出したサンディは、武器の選択が意外だったらしく目を瞬かせていた。ウォル口村に落ちてからは、ずっと剣を装備

していたため、剣を選ぶと思っていたのだろう。

「おじさん、これ下さい！」

会計を済ませて外に出る。

「さあて……装備もバツチりみたいだし、後はアルティナとか言うヤツを追うわよリタ！」

サンディは腰に手を当て意気込んでいる。

「それに……あんまり時間かけると、あの人怒りそーだしさあ」

先ほど、アルティナには先に行つてもらつよう頼んでいたのだ。

それは、武器の店や防具の店を見ていたら思い出したことがあったからで。

前回のことがあり、リタは兵士に見咎められるのを心配していた。

「うーん、そうだけど……ねえサンディ、本当にこれで大丈夫？」

「だから、あたし的には全然オツケーなんだってば」

リタは旅人の服を着用し、ウロコの盾と先ほどの扇を装備していた。

「じゃあ、お城に行こっか。あの人も待ってるだろうし」

城へ向かおうと歩き出した時、井戸端会議をしていたおばさん達の会話から気になることが聞こえてきた。

「……知ってます？ あの武器屋の旦那さん、黒騎士に愛馬を持っ
ていかれたんですって！」

あの武器屋、とは今し方リタが出て来たところの武器屋である。

「まあ、そうだったの？」

「お気の毒よねえ……」

その話を聞いて、リタは武器屋の建物を振り返った。

「おじさん、元気そうに見えたのに……」

笑顔で会計をしてくれたけれど。

「ああ見えて、かなりこたえてるのかも」

「……そうだね」

武器屋のおじさんの為にも、黒騎士退治頑張らなければ。

決心を新たに、リタは改めて城下町の奥にそびえ立つセントシユタイン城へと向かった。

そして、城に着いたリタはアルティナと兵士の間で繰り返されてきたいざこざに巻き込まれることとなる。

「また貴様か！ 城に入れるわけにはいかないと何度言えば分かる
！！」

「またか……さっさと入れろって言ってるだろうが」

一体何があったのだろうか。兵士とアルティナが言い争っていた。

(なんで?!)

城の門で、まさに一触即発の展開。

そこには兵士二人とアルティナがいたのだが。その兵士の内の一人がアルティナに食ってかかっていた。

しかも、アルティナは全く相手にしていない様子。思いつき「面倒くさい」と顔に書いてあった。

「うわー、何このヤバ気な空気！」

サンディは、リタの横で面白がっていた。

(サンディ、こんなところで野次馬根性見せないでよ……)

しかし頭を抱えているのは、リタだけでは無い。

「またこの二人は……勘弁してくれないものか」

もう一人の兵士が、少し遠巻きに騒ぎの行方を見守っている。「また」と言うことは、以前からこんなことがあったらしい。

「あおう……どうしたんですか、これ」

控えめに尋ねると、兵士はリタを見て目を瞬いた。

「君は先程の……」

リタを門前払いした兵士だった。

「あの二人の知り合いか？」

「兵士さんの方は知らないんですけど。まあ……戦士さんの方とはそんな感じです」

まだ出会ってから一日も経ってない仲であるが。

「そうだったのか。実は、ここ数日間ずっとこの調子でな、何とかならないものか。全くアイツは……職権濫用もいいところだ」

兵士は頭を抱え込んだ。出来るならリタも頭を抱えたいところだが、そんなことをしている場合では無かった。

「お、お二方……とりあえずその辺で……」

躊躇いがちにリタは仲裁に入る、が。

「だいたい、貴様のその不遜な態度はなんだ！ 礼儀というものをわきまえる……！」

「お前に言われる筋合い無えし。礼儀をわきまえて欲しいなら、それなりの功績を上げるんだな」

「何だと……！」

二人は全く聞く耳を持たなかった。

「あーあ、全つ然聞いてないし。どうするリタ？ このまま戦闘ってゆーのは流石にいただけないってゆーかぁ……町中でそれはごエ

ンリヨしたいってゆーかぁ……」

サンデイもこの状況は危ないと思ったのか、そわそわと辺りを意味も無く飛び回った。

「おい……いい加減その人に突っ掛かるのは止めないか、バレン」

頭を抱えていた兵士は疲れた様子で、バレンというらしい兵士を宥めた。

しかし、相手は全く聞かなかった。

「止めるな、俺はコイツと話してるんだっ！」

宥めたのが裏目に出てしまったらしい。逆上した兵士は腰にある剣の柄を握った。

「へえ……やる気が」

それを見て、アルティナも柄に手をかける。

「ウゲツ……アイツらマジで?! こんなところで流血沙汰なんてシ

「ヤレになんないっつの!!」

「二人とも、やめて!」

「やめるんだ二人とも!」

三人の声は届かず（内、一人は聞こえなくて当然だが）、二人は剣を抜き今にも乱闘が起きる……かと思われたその時。

「やめなさいって……言ってるでしょー!!」

リタは素早く、買ったばかりの扇を取り出し大きく一振りした。アルティナは一瞬、何が起きたのか理解出来なかった。というか、今も理解出来ていない。

（桜……?）

遙か東に存在するという華。その花びらが視界一面を覆って他にも見えなかった。

手で払おうにも、花びらの量は半端でなかったため意味無し。というか、なぜこんなことになったのか。まあ、心当たりがないわけではないが。

(アイツか……?)

リタが大声を上げた途端に目の前が突然一面花びらだらけ……だったので、何らかの方法　幻惑の効果のある技と思われる　を使つたのだとアルティナは確信した。

少しすると、視界が一気に開け目の前には阿呆面を呈する兵士失格な馬鹿。間抜けなツラ……とかなり失礼なことを思いながらリタに意識を向けた。リタは扇を持ち突っ立ったままで半ば呆然としている。

ちなみにこの時リタは、「しまった!!」だとか思っているのだが、それは皆の知る由も無い。

(必死すぎて、加減忘れた……)

先程の花吹雪のせいで町の一部が花びらだらけになった……かと思われた。しかし桃色の花びらはいつの間にか跡形も無く消えていた。

その時、門の奥から感心の声が聞こえて来た。

「さすがです！　泥棒に真っ向から立ち向かっただけありますね」

どうやらその人物と知り合いだったらしく、リタが「あ、」と声を

上げた。

「あの時の……」

「すみません、血気盛んなヤツらばかりで。どうぞ城にお入り下さい」

なんと、あっさり入場を許可された。今までのは何だったのだろうか。リタもアルティナもそう思い、目を瞬かせる。

「あなたのような勇敢な方に黒騎士退治をしてもらえるなら大歓迎ですからね」

にっこりと穏やかな笑顔をリタに向けるその人を見て、アルティナは思った。

こいつ、本当に兵士か？

「た、隊長?!」

隣の兵士、つまり馬鹿（最早敬意を評する価値無し）が素っ頓狂な声を上げた。

優しいな風貌のこの人は、兵士達の中の隊長なる人だったらしい…。

「やあ君たちお勤めご苦労様。わざわざ余計なことをしてくれてありがとう。……以後気をつけるように」

最後の一言はかなり低音。兵士の隊長は、しっかりと兵士 主に馬鹿 に釘を刺し、どうぞこちらにとリタとアルティナを誘導した。

(今回はこいつのお陰、か)

これでやっと、セントシユタイン王に会えそうだ。

「あの、隊長さん……ですか？ ありがとうございます」

「いえいえ」

隊長は、終始ニコニコとしていた。

「黒騎士退治に志望してくれる兵士はたくさんいたんですがね……皆が皆、黒騎士にこてんぱんにされて帰って来るもので。ほとほと困っていたところなのですよ」

かく言う私もそうなんですけどね、と隊長は頬を掻きながら苦笑した。

……全然隊長らしくない。

「あんだ、本当に隊長か？」

リタが気になっていたが聞けなかったことを、アルティナはズバリ尋ねてしまった。

(な……なんで言っちゃうのかな、この人は?!)

しかし、やはり隊長の反応は穏やかだった。

「いやあ、良く言われます。私はそういうイメージとは掛け離れていますからね。どちらかというと僧侶みたいだ、と」

それを聞いて安堵の息をついたリタだったが、すぐ隣のアルティナに隊長まで聞こえないくらいの小声で詰め寄った。

「なんで聞いちゃうの?! 私ちょっと我慢してたのに……!」

「我慢してたのかよ。つか、このくらい別にいいだろ」

「気にしてたらどうするの!?!」

「知るか。隊長だったらそんな小っさいことは気にしない」

「何を根拠に?!」

とかなんとか言っているうちに、王座に着いたらしく隊長がピタリと足を止めた。二人が言い争っているのを見て、隊長は一言。

「仲がよろしいですねえ……」

それを聞き、すぐに後ろをついて来ていた二人は「違う!」と反論したのだが。

(二人同時に言われても説得力が無いんですけどね……)

その場が(というか目の前の二人が)混乱しそうだと思った隊長は、それ以上言い募るような野暮なことはしなかった。

「フィオーネ、何度言えばわかる。黒騎士などに会いに行くなぞ、このワシが許すわけないだろう！」

「ですが……！」

リタ達が王の間に到着した時、王は黒騎士のことで娘と取り込み中だった。

「王様、お客様でございます」

隊長が話し掛けると、王は気まずげに一つ咳ばらいをした。

「……ウオツホン。客人か、すまなかった。こちらへ参られよ」

王は冠をかぶり立派な口髭を蓄えた、いかにも貫禄のある風体だった。

その横には、城下で美しいと評判の王女フィオーネが控えている。

「では、私はこれで……」

一礼して去って行く隊長を見送ってから、リタは王に顔を向けた。

「あの、私達……黒騎士退治に来たんです」

「やっ！ ということは……ぬしら、城下町の立て札を見てこちらへ参ったのだな！」

王は椅子を蹴らんばかりに立ち上がった。

「そうか！ 黒騎士退治を引き受けてくれるのか！ ……名はなんと申す?!」

「私はリタです。で、こつちが……」

「……アルティナ」

アルティナは素っ気なく自分の名前を一言告げる。
王様に対する態度ではなかったが、別段王は気分を害した様子は無い。

「リタとアルティナか。この事件に無関係なぬしらに黒騎士退治を頼むのは、もちろん理由があるからなのだが……。実はな、黒騎士のヤツはワシの娘フィオーネを狙いこの城にやってきたんじゃないよ」

「お姫様を？」

王の話によると、黒騎士は王女であるフィオーネを狙ってセントシユタイン城を襲って来たらしかった。そして、フィオーネをシユタイン湖に届けるよう言い残して去って行ったという。

「……しかしワシはその言葉を黒騎士のワナだと思っておる！　ワシがシユタイン湖に兵を送り城の守りが薄くなったところでヤツは城にやって来るに違いない！」

王の熱の籠った力説に圧倒される。さすが王様……と感心していたリタだったが、それどころではないと思ひ直す。
そこに、フィオーネが異議を申し立てた。

「お父様……！ 見ず知らずの方を巻き込んではなりません！」

しかし、その反論が王に聞き届けられることは無かった。

「お前は黙っていなさい。断じてあやつのはきなようにはさせん」

あくまでも、王はフィオーネを黒騎士に会わせようとしない。

「あんまりですわ……。私の気持ちを少しもお分かりになるうとしない……。！」

頑固な父に、フィオーネは目に涙を溜めて去ってしまった。

「お姫様っ?!」

フィオーネの行動にリタはオロオロとするばかり。アルティナはというと、親子喧嘩を間近で見せられたせいか、げんなりな顔をしていた。

「……コホン。すまん、フィオーネは正義感の強い娘。この件に責任を感じておるのだらう」

気まずさからか王は一つ咳ばらいをし、再び椅子に座ってから、居住まいを正した。

「それではリタ、アルティナよ。これからシュタイン湖に赴き黒騎士の所在を確かめて来てくれ」

シュタイン湖とは、セントシュタイン城の裏手にある北の橋を渡って更に北にある湖のことだ。

「これが上手くいけば褒美をとらせるからな。しっかりと頼んだぞ、二人とも！」

威勢良くリタ達を送り出した王であった。

フィオーネ姫のことを放って置いたままで良いのか、気になりはしたのだけれど……。

「あー、シュタイン湖は城の北にあるって言ってたよね……」

歩き始めたアルティナは訝しげな顔をしていたが。

そっち、南です。

「もしかして方向音痴だったり」

「……地理が頭に入ってれば迷ったりしない」

つまり……知らない場所では迷子にはならない、と。
シュタイン湖へ向かう途中、意外な事実が発覚した。

（そうだったんだ……！！）

軽く衝撃を受けたリタだった。

弱点なさげに見えるのになあ、と思ってる傍から。

「そっち、西……」

持ち前の方向音痴を存分に発揮しているアルティナであった。

「何あの人、迷子の天才？ さつきから見当違いの方にしか行っていないじゃん」

「……言わないでサンディ」

聞こえないだろうけれども。

「ていうかサンディ、今出てきて話しかけられてもちょっと困るかも……」

理由はアルティナがいるからなのだが。

「リタは気にしすぎだって！ あっちは見えてないんだからサ」

「そんなこと言われても、私いろんな人から変人認定されるのは嫌かなあ」

「……なんだその黒いヤツは」

明らかにサンディのことである。

「ちょっと、アンタ！ 黒いヤツってのはいくら何でも失礼……っ
?!」

はあぁー……!?

サンディは驚愕の声を上げた。しかし、驚いたのはサンディだけではない。

「サンディが見えるの?!」

リタもまた、驚いていた。

地上に落ちてから姿が見えるようになってしまったリタはともかく、妖精わしきもののサンディを見ることが出来るなんて有り得ない。もし見えていたのなら、今頃町は大混乱である。

「マジで、マジで見えてるわけ!? 超有り得ないんですケド……
普通の人間に見えるわけ無いのに。あんた何者?!」

「それはこっちのセリフだ。お前こそ……」

何者が問おうとしたが、サンディの言ったことに、はたと気がついた。

「普通の人間には見えない……?」

リタはぎくりとした。

(絶対……絶対に私、問いただされるような気が……!!)

確信に近い予感は、やはり当たっていて。

こちらを向いたアルティナの目が言っていた。

だったらお前は何者だ、と。

リタはただ今現在進行形で、ちょっとした窮地に立たされていた。

「で、どつどつことだ？」

「それは……そのう」

アルティナに詰問され、リタは口ごもった。

(どつどつ……)

本当のことを喋ってしまった方が良いのだろうか。しかし信じてくれるのかどうか……。

(しかも、簡単に喋っても良い内容なのかな?)

天使云々を話したところで、地上に影響を与える可能性は無いわけでも無い。それに。

(これといって、良い嘘とかも思い付かない)

元来、嘘をつくのが苦手なリタであった。

変な嘘についても絶対バレるといふのは、経験上すでに分かっている。

だったら、もう話しても別に良いのではないか。

まあ鼻で笑われたり、逆に頭を心配されたりする、ということはあるだろう。

（この人なら……口が軽そうには見えないし、きっと話しても大丈夫……多分）

長い沈黙が流れる。

風が吹いた時、リタは俯きかけの顔を上げた。

「これから話すこと、信じてくれますか」

挑むような目をアルティナに向けると、相手も同様にした。

「……話してみる」

それには、リタが天使界にいたところまで遡らなければならない。

守護天使としてウォル口村を守っていた、あの頃に。

「あつ、お師匠！ イザヤールお師匠ー！！」

滝の近くに現れた人物へ向かって、元気良く飛んで来る少女がいた。

「ほら、こんなに星のオーラが集まりましたよ！」

手元には、不思議な光を放つ羽根のようなものがあつた。

星のオーラというそれは、人間の信仰心が結晶となったもの。星のオーラを集め、世界樹に捧げ、女神の果実を実らせることで天の箱舟を呼び寄せることができる。

そうして神への道は開け、天使達は永遠の救いを得ることが出来るのだと言つ。

だから、天使は星のオーラを集め続けるのだ。

「よくやった、リタよ。しっかりと役目に励んでいるようだな」

褒められた少女・リタは浮かべていた笑顔をさらに深めた。

「私に代わってウォル口村を任せるときは少々不安ではあったが……。お前の働きにより村人たちも安心して暮らしているようだ。立派に役目を引き継いでくれて、このイザヤール、師としてこれ以上の喜びは無い」

リタの師匠であるイザヤールは自分の守る村を、最近弟子に託したばかりであった。

これから世界中を回るつもりらしく、最後に弟子の顔を見ておこうとウォル口村に立ち寄ったという。

「……ところでリタ、お前にまだ教えていなかったことがあったのだが」

「……そうなんですか？」

リタはこてんと首を傾げた。身長が低いのも相まってか、かわいらしさが引き立てられる。師匠のひいき目を除いても充分美少女な弟

子であった。……本人は無自覚なのだが。

「生きている人間を助けることも天使の使命だが、もう一つ！ 死してなお地上をさ迷っている魂を救うことも天使である私達の使命
お前にも聞こえるだろう、この村のいずこからか救いを求める魂の声だ」

「声……」

目を閉じて耳を澄ませると、確かにすすり泣く声が聞こえてきた。

……なんでみんなオレのことを無視するんだ？

「あつちから、聞こえる……」

声を聞くなり、リタは今来た道に戻った。

辺りをさ迷い声を上げていたのは、がたいが良くて若い男の幽霊だ

った。

「……ん、あんたオレが見えるのか?! 教えてくれっ、一体どうして皆オレが見えなくなっちまったんだ?」

リタにすがろうとした男は、リタの出で立ちが普通とは違うことに気がついた。

頭上の輪、そして背中に羽根のあるその正体は……

「……あれ? アンタその姿、もしかして天使様……なのか?」

リタは何も答えず、ただふわりと笑った。

天使だと認識した男は、自分の状態にやっと気付いたらしい。

「そうか、俺はとっくに……。なあそうなんだろ?」

同時に、男の体が淡く発光し始める。

男は、満ち足りた笑顔を浮かべていた。

「ありがとう天使様、おかげでようやく自分が死んでることに気付けたよ。誰にも気づいてくれないのはホントに辛かった。……だから

ら、もう行くことにするよ」

最後の言葉を発した時、男はほとんど消えかかっているも同然だった。

そして、男が唯一残していったものは……

「星のオーラ……」

「よくやったなりタよ」

一部始終を見ていたらしいイザヤルが、後ろから歩み寄った。

「あの者も悔いなく天に召されただろう。魂が出すオーラはひときわ大きく輝いている……」

今しがた手に入れた星のオーラは、今までのものと比べものにならないくらい、まばゆい光を放っていた。

「男の人が生きていたという証、ですね……」

どうか、安らかに眠って欲しい。

イザヤールは「そうだな」と相槌を打った後、何かに気付き空を見上げた。

「天の箱舟か……」

星空の中を、金色の列車が横切って行った。

「近頃やけに慌ただしい……。気が変わった。リタよ、私は今一度天使界へ戻るがお前は どうする？」

「はい、私も戻ります！」

元気よく答え、天使二人は天使界へと向かって羽根を広げた。

「リタ、私はオムイ様と話がある。悪いが先に行かせてもらおうぞ」

そう言って、イザヤールは先を行ってしまった。

リタはというと、とりあえず星のオーラを世界樹へ捧げに行くことにし、ひたすら階段を上っていた。

「まあリタ、随分たくさんオーラを集めてきたのね！」

弾んだ声がして振り向くと、リタの友達がいた。

「フェリス！」

鶉色の髪に紅い目をした少女　フェリスは、リタ以上に派手な色合いをした天使である。リタより頭一つ分高い彼女は今、イザヤールの友人ラフェットに着いて勉学に励んでいる。

「早く世界樹のところへ行って捧げて来なさいな、今すぐいことになってるらしいから！」

「うん、今ちよつど行くところ」

上機嫌にリタの背中を押すフェリスの様子から、もうすぐ世界樹が女神の果実を実らせるのだからうことが分かった。

「それにしても、もうすぐで女神の果実が実るって時にオーラを捧

げられるなんて……やっぱりリタは運が良いわね！ 同期の中では守護天使なんてあなたくらいだし、親友として鼻が高いわ」

フェリスの言う通り、同じ年代の中でリタ以外に守護天使ほどの地位の者はいなかった。

「そんな、お師匠のおかげであって私は別に……」

周りからも言われることだった。

「また、あなたは謙遜ばかり言うんだから。イザヤール様はあなたをお選びになったのよ？ もっと自信を持つべきだわ、というか持ちなさい！」

実際、フェリスの言葉は真実である。が、弟子入りする前のリタはどうかと言うと……優秀とは言い難かった気がする。

確かに魔法や歴史に関する成績はかなり秀でていたのだが、武術はからきしだったもので。イザヤールに弟子入りしてからは彼自身、武術 特に刀剣 に抜きん出ているため何とか人並み以上になったものの。

「うーん……。私的には、お師匠にはもっと相応しい弟子を取った方が良かったんじゃないかなと思ったわけで」

こんな、机に向かう方が似合う天使なんかよりも。

「あなたね……そういうところは昔っから変わらないんだから！
やっと性格が丸くなったと思ったけど」

「フェリス、その話題は勘弁して……」

自らの過去を黒歴史と評するリタである。

向かいから悪意の満ちた声が投げ掛けられたのは、そんな時である。

「あら、守護天使サマのお帰りかしら？」

「いいわよね。お師匠様が優秀だと、こんなに早く守護天使になれて」

表面上は称賛、しかし厭味にしか聞こえないその声。

リタとフェリスの同期の天使だった。

“ 師匠が優秀だから ”

“ どうせ、実力なんかじゃ守護天使になれなかつたくせに ”

そう言った類のひがみや妬みは、事あることにリタを苦しめた。しかし、リタは今までずっと何も言わず悪意ある言葉を流してきた。そういうところも相変わらずだ、とフェリスは思う。

イザヤールの方針により、性格は何とか矯正された。しかし、根本的な部分はどうにもならないらしい。

（この誰にでもお人よしなところ、どうにかならないものかしら？
！）

そう思いながらも、いつも言われっぱなしというのはシヤクなので、自分がある時だけでも反撃しようと思心に決めていたフェリスであった。

「まったく……リタよりもよっぽど能無しにくせによく言うわ」

「なっ……、アンタには関係無いわー！」

「あら、ごめんあそばせ。うっかり口が滑って真実を言ってしまったわ」

「なんですって?!」

怒りの矛先がフェリスに向かったのを見て、リタは嫌味を言われたにも関わらず、相手を思っただけで心の中で合掌をした。

こういう時は大抵、フェリスに噛み付いた相手が返り討ちに合うパターンであった。

「もう一度言ってみなさいよ!」

「私、二度も同じこと言っただけで、皆さんのお高い鼻を折る趣味無いわ」

そこにいる嫌味な女天使二人組は、実は守護天使まで一番近い人物だと言われていた。しかし、リタが先に守護天使の名を取られたことで、プライドが傷ついたらしい。んな安っぽいプライドなんか捨てちまえよ!と言いたるところだが、リタならともかくフェリスはそこまで優しくくない。

だから今度は違う言葉をお見舞いすることにした。

「あなた方、私に関係無いと言っただけだね。リタがあなた達以上に無能扱いなんて、黙っていられないのよ。そんなの日々努力して

いるリタが気の毒だし、ひいてはイザヤール様も気の毒だし？ というか、イザヤール様しか引き合いに出せないあなた達は、すでに負けてるって気付けないものかしら？」

ここまで言う間、フェリスの息継ぎはゼロ。彼女の畳み掛けるような物言いは、相手を圧倒する力がある。

一瞬怯んだ女天使二人であったが、すぐに気を取り直し、フェリス
というか、その背後にいるリタに言い返した。

「イザヤール様が師匠じゃなかったら、何も出来なかったくせに…
…いい気になってるんじゃないわ！」

「へえ、師匠がイザヤール様じゃなかったらこんなことにならなかつたって言いたいんだ？」

相手を逆なでするような口調のフェリスに、ついに頭に血の昇った相手は、この舌戦の勝敗を決める一言を言い放った。

「私だって、イザヤール様が師匠だったら……！」

「ふう〜ん？ つまり、あなた達は今のお師匠様に不満があるって
言いのね？」

相手がギクリと身を引いた。それを意地悪く眺めながら、フェリスは更に言い募る。

「あら、そうだったの。だったら……親切にも、私がそれを言いにくいあなた達の代わりに、言ってあげるのにね」

「う……うるさいっ！ 余計なお世話よ！！」

余裕を無くした二人は、そそくさとその場を去って行くのであった。

「さすがフェリス……。ありがとね」

「リタ、あなたねえ……。私がいなかったらどうなってたことか分かってる?!」

呆れ半分、心配半分の顔をしたフェリスだったが……。

「確かに嫌だなって思うけど、言われるだけなら良いかなって……」

傷つきはするものの、基本立ち直りの早いリタである。

一方、間の抜けた返事に、フェリスは一気に脱力感を覚えた。

「私、あなたの将来が不安だわ……」

そんな真剣に言われても困る。

「……ま、今それをどうのなんて言っても仕方ないか。リタ、そろそろ世界樹の方に行った方が良いわよ」

「あっ、そうだった!」

自分の使命を思い出したりタは、慌ただしく階段を上りはじめた。

「じゃ、フェリス……またあとでね!」

「ええ、またあとで」

しかし、この後の出来事により、約束が果たされることは無かった。

世界樹の傍には、すでに先客がいた。

「……いよいよ世界樹が女神の果実をつける時がきたのかもしれない
の」

「はい、あとほんの少しの星のオーラで世界樹は実を結ぶはずですよ」

イザヤールと長老・オムイであった。

草を踏み締める音に気付いたイザヤールは、弟子の姿を認めると表情を和らげた。

「オムイ様、イザヤールお師匠！」

「ちょうど良いところに来たな、リタよ。見ろ、この世界樹を……。星のオーラの力が満ちて今にも溢れ出しそうだ。さあ、星のオーラを掲げなさい」

イザヤールの言う通り、世界樹はいつもの様子と違い、幾多にも光り輝いている。

星のオーラを捧げるべく、リタは光を発する大木に歩み寄った。

「女神の果実が実るとき、神への道は開かれ我ら天使は永遠の救いを得る……。そしてその時、我らを誘うは天の箱舟」

オムイの言うそれは、昔から言い伝えられていること。

いよいよ世界樹の実を結ぶ時が来たのかもしれない。

星のオーラを掲げると、オーラは世界樹の中へと消えて行く……。

すると一層に輝いた世界樹は、金色の果実をたわわに実らせた。

これが……

「女神の果実……！」

そして世界樹が実を結ぶと同時にやって来る、金色の列車……。

「あれが天の箱舟……！　すべて言い伝え通りじゃ！」

オムイの言葉を、リタは半ば呆然と聞いていた。

言い伝え通りならば、自分達は天の箱舟に導かれ、永遠の救いを得ると言っ。

(私達は、これに乗ってどんなところに行くんだろっ……)

昔からの疑問だった。

神への道、ということは神様の元へ導かれるのだろうが、それでは
“ 永遠の救い ” とは何なのか……。

箱舟が停車した、その時。

黒い光が、天使界を貫いた。

あちこちから悲鳴が聞こえる……。

「これはどうしたことじゃ……！」

後ろからも、動揺の声が聞こえてきた。

「わしらは、騙されていたのか……っ?!」

喘ぐよう呟くオムイを嘲笑うかのように、黒い稲妻のような光は天使界中を襲う。

そしてそれは天の箱舟も例外ではなく、光が直撃した箱舟は無惨にもバラバラになって下方へと落ちて行った。

「箱舟が……!」

慌てて駆け寄ろうにも、嵐のような風が吹きすさび立っていられない。

必死に地面にしがみつくが、体力的に最早限界が近かった。

それに気付いたイザヤールはリタに向かって手を伸ばすが、もう遅い。

「リタ……!」

強風に煽られ、リタの体は上空へと舞い上がった。

「お師匠……っ!」

伸ばした手は空を掴み、暴風によってリタは女神の果実と共に地上へと落ちて行った。

「そういうことで、私は今天使界へ帰る方法を模索しているわけ
……………」

経緯をかい摘まんで説明したリタは、それからチラリとアルティナを見上げた。

「そしたら黒騎士を退治することになって……………」

現在に至る、と。

リタ達は誰かが薪をした跡に手頃な丸太を見つけ、そこに座っていた。位置的にはリタとアルティナ向かい合った感じである。

サンディはというと、リタの肩の上を陣取って羽根を休めていた。

「そーゆーこと。ただの人間が天使を見ることなんてフツーじゃ有り得ないの。つまりアンタフツーじゃないワケよ、分かる？」

「人を異常者みたいに言うな」

サンディの言葉に慥然とするアルティナであった。

「つまり、アンタらは黒騎士を倒せば天使界とやりに帰れるわけか」

「……多分」

サンディが言い出したことなので、ハッキリしたことは言えないのだが……。

「……………」

アルティナは少しの間黙り込んでいたが、やがて腹を括ったかのようにつつ溜息をついた。

「そついついことなら、おつおつと黒騎士倒しに行くぞ」

すつくと立ち上がるのを呆然と見遣るリタだったが、アルティナは構わず歩き出す。

「何ボサツとしてんだ、置いてくぞ」

慌てて後を追いかけるリタの顔は、まだよく分からないと言っ顔をしていた。

「私の話、信じてくれたの?! 何で?!」

「その話、天使界やら星のオーラやらって、作り話の域を越えてるだろ」

それに……と、アルティナは続けた。

「そんだけ壮大な話を即座に作れるほど、お前頭の回転速くなさそう」

サラッとひどいことを言われたような気がする。

「……つまり馬鹿って言いたいんでしょーか」

そう言っているようにしか聞こえないのだが。

アルティナが、今まで仲間を持たなかったのも頷ける。これでは乱闘が起こっても不思議でないだろう。

(分かってる、私でも分かるよ、自分が馬鹿ってことくらい！)

面と向かって言わなくても……とふて腐れたリタだったが、

「お前みたいな馬鹿は嫌いじゃあない」

アルティナは、確かにそう呟いた。

(もしかして……)

今、なんだか分かった。

口が悪い……というか思ったことをハッキリ言ってくれてしまうのだ、この人は。

(良く言えば正直、だけど)

実際、正直どころの問題ではないだろう。

(まあ、でも……)

とにかく、アルティナの人物像が少しだけでも掴めた。

それだけで、なんだか一歩前に進めた気がしたリタであった。

「おっそーい！！ てゆーか黒騎士来ないじゃん！」

シユタイン湖にサンディのわめき声が響き渡る……。

リタ達は、湖のほとりで黒騎士がやって来るのを待っていた。が、いつまで経っても目的の人は現れない。辺りはすっかり暗くなり、星が瞬きはじめる時刻となってしまうた。

「女子との約束ブツチするなんて有り得ない！！ 信じらんないですケド?! 王様には黒騎士なんていなかったって言っただけだし、帰っちゃおうよー」

「そんなこと言っても……今から帰ったら日が明けるよ。それにほら、アルは帰る気無さそうだし」

あの様子だと、数日は待ちそうだ。

もちろん、リタは数日も待つつもりはないが、もう少しだけ待ってしようと思っていたところである。

「アル？ まさかあの無愛想戦士のこと？」

「無愛想戦士……？」

無愛想戦士 的を射たあだ名ではあるが……。

(近くにいらなくて良かった……)

幸いにも、アルティナとは数十メートルほど離れていた。

「ナニ、アンタらそんな仲良かったっけ？」

「そついうんじゃないけど……呼んで良いか聞いたら良いって言われたから」

アルティナの返答が「勝手にすれば」だったのは言わないでおく。リタは基本的に、名前が長かったり言いにくいと感じた時はあだ名で呼んでいた。リタの天使界での友達であるフェリスが良い例だ。普段、みんなからは“フェリス”と呼ばれているものの、実は本名はフェリスティア。正式な場でしか使われず、本人も面倒臭いと、署名はあだ名の方を使ってしまう始末である。

「ふうーん。で？ アイツは帰らないって言ってるワケ？」

「というか、あそこから動かないし」

動く気配すらない。

「…………えーっ、もういいじゃん。帰っちゃおうよ」

「ええ?! そんなのダメだよ!」

「だって、動かないんでしょ? もうやってらんないわヨ」

リタは、そう言って城へ帰ろうとするサンディと湖のほとりにいるアルティナを交互に見て困惑する、が。

「なんつって振り返ればヤツがいるみたいな!？」

サンディはすぐにクルリと振り返った。「冗談だったらいいことに安心。

が……サンディの顔がみるみる内に青くなったので、どうしたのか聞こうとした、その時。

後ろから草を踏み分ける音がした。

「マ、マ、ママジっすかぁー!？」

リタが振り向くと、そこには黒い馬。

そして、それに乗った黒い甲冑の騎士がいた。

「誰だ貴様ら……貴様らに用はない。姫君はどこだ?!」

武器を取り出し臨戦態勢に入ったリタであったが。

「姫を出せ！ 我が麗しの姫を！！」

剣を構えた黒騎士。黒い兜の奥から垣間見えたその顔は……。

「……………っ?!」

素顔を直視し、愕然とした。

「で……………出たああああーっ!!」

「亡霊が出たみたいと言っな！」

駆け付けたアルティナが剣を引き抜きながら怒鳴る。

「いや、本当に！ 本当に亡霊だから！ 目が赤く光ってたもの！
！ がい骨だったもの!!」

日常的に幽霊を見るヤツが何を……………といった感じだが、リタが見る

幽霊とは生前の姿をしており、あんなおどろおどろした骸骨が兜の奥に潜むような相手ではない。

「何を先程からごちゃごちゃと抜かしている……。さっさと姫を出さぬか！」

混乱のあまり、喚くりタメがけて黒騎士の剣が振り下ろされる。それをかわしたところで態勢を整え、アルティナは黒騎士に一太刀浴びせた。

「ぐっ……貴様!!」

アルティナが標的になったところで、すかさずリタが攻撃を仕掛ける。

「花吹雪!!」

大量の花びらが舞い上がり、黒騎士は攻撃が出来ない。

「おのれ……小癩な」

苛立ちをあらわに黒騎士が剣を振り回す。

だが、被害を受けたのは彼だけではなかったりする。

「おまつ……味方も巻き込んでどうする！」

「え、えへ……実は私も巻き込まれてたりして」

味方まで被害があるのでは、どうしようも無い。

「お前がしたことだろ！ なんとかならないのか？！」

「んな無茶な、だって風向きが急に変わった……あ、」

何か閃いたらしいリタは、ポンと手を叩き合わせた。

「湖に飛び込もう！」

「もっとマシなの思いつけ！」

これ以上無いほどマシだよー、とリタはぼやく。

「このままだと、むやみやたらと黒騎士が振り回してる剣にやられてっちゃうし……」

確かに黒騎士の振り回す剣は視界が遮られているため、かなりの脅威ではあった。

「やっぱりここは一つ、腹くくって飛び込もう！」

「アホか！！ 季節を考慮……って聞いてんのか？！」

リタはアルティナの腕をガツシリと掴んで自分の腕に絡めた。

「お前……まさか……」

「旅は道連れって、よく言うよね！」

たたり、と背中に汗が伝うのを感じた。

「えーいつ」

緩い掛け声、意外に強い引つ張る力と共に傾く体、近づく水面。

次の瞬間、アルティナの怒号が湖に響き渡った。

つまりは、一蓮托生。

ザッパン、と水飛沫をあげた湖。

しばらくして、道連れにされたアルティナと道連れにした張本人の顔が水面から飛び出した。

「テメ……本っ当に有り得ねえ!!」

「でも、ちゃんとあそこから抜け出せたよ!!」

やがて岸部にたどり着くと、出来る限りの水分を払い、花びら吹き荒れる一帯を眺めた。
なんだか以前よりもパワーアップしているような気がするの、は気のせいだろうか……。

そして当然だが、黒騎士（マヌーサ状態）にはうかつに近付けない。

「どうすんだアレ」

向かったが最後、黒騎士の剣によって首チョンパである。

「しまった、遠距離攻撃出来る人がいない……！？」

「今更かよ」

呪文、ブーメラン、弓など……。今は、遠くから攻撃することが出来る人材が欲しかった。

（ん、呪文……？）

リタは、とあることを思い出した。

「私、呪文使えたじゃん」

少しだけだけれど。

「ようし、ここは試しにーっ……ヒヤドー！」

花ふぶきの中ではあったが、確かな手応えを感じた。

氷塊を相手に放つという、この初歩的な呪文は、以前天使界でイザヤールに教えてもらった……わけではなく、本を読んでいたら何気に出来てしまったものだ。

調子に乗って、もう一段階協力的な魔法を修得しようとした時は、誤ってベッドを氷漬けにしてしまったこともあるけれど。

夜中、自分の部屋での出来事であった。

そんなこともあったが……まあとにかく、そんなこんなで呪文を使えるようになったという訳だ。

話を戻して、黒騎士はと言つと……

「な、なんか静かになった……？」

呪文をぶっ放してから、動く気配の無い黒騎士。逆に不安になる。

「あ、ナニ？ 終わったカンジ？」

「……サンデイ」

「ここで、どこかに隠れていたらしいサンデイが戻って来た。

「いやさー、アタシさっきまで物陰に隠れてたワケよ。でも、ついウトウトしちゃって状況がハアク出来ないみたいなの？ いったいな二事？」

「……寝てたんだ」

「なんだか複雑な心境だった。

この大変なときに寝ることが出来るとは、なかなかの精神の持ち主である。」

その時、花ふぶきが弱まるのを感じ、そちらの方を見ると、薄ぼんやりと黒騎士の姿が浮かび上がって来た。

「何故……何故姫君は貴様らのような者を私のもとへ遣わせたのだ……」

ダメージを受けて、我に返ったのだろうか。それからというもの、黒騎士はぱったりと大人しくなった。

「氷呪文喰らって、頭が冷えたのかな……」

「リタ、そのギャグ面白くない」

「いやっ、私そいつつもりで言ったわけじゃ……！」

氷の呪文と頭が冷えたという部分を掛けたと思われたらしい。サンデイにバツサリと言われたリタであったが、そんなつもりは欠片も無かった。

「何やってんだお前ら……」

アルティナにも呆れられた。幸い……なのか、黒騎士に今のやり取りは聞こえてなかったみたいだ。

「……メリア姫はもう私のことを……。あの時交わした約束は、偽りだったというのか？」

黒騎士は馬から降りていた黒騎士は呆然と眩き、しかしサンデイとリタ、アルティナの三人はそのセリフに突っ掛かりを覚えた。

……メリア姫？

「ねえリタ、メリアって誰よ？ 確か、あの姫の名前はフィオーネ……メリアなんて名前じゃないんですケド」

「そ、それは真か……っ!？」

今のはしっかり聞いていたらしい。

サンディの言葉にハツとした黒騎士は三人に真偽を迫った。

「キヤーツ！ ナニナニ何でアタシが見えてんのっ!？ マジビツクリしたんですけどっ!！」

驚いたのは、サンディだけではない。

(サンディの姿は普通の人間に見えないはず……。ってことは……)

やっぱり黒騎士は、亡霊？

それとも……。

「教えてくれ、あの城にいたのはメリア姫ではなく別の者だったと
いうのは本当なのか……？」

三人は互いに顔を見合わせ、戸惑いながらも状況説明を始めた。

「何てことだ、あの姫君はメリア姫では無かったのか……」

真相を知った黒騎士は、幾分か冷静になったようだった。

「言われて見れば……彼女はルディアノ王家に代々伝わるあの首飾
りをしていなかった」

「じゃあナニ？ ぶっちゃけフィオーネ姫とメリア姫って人を間違
えちゃったワケ？ どんだけ似てたのよー」

二人の姫君はそれほど似ているということだろう。

「私の名はレオコーン。……そしてメリア姫というのは、我が祖国
ルディアノ王国の姫。私とメリア姫は永遠の愛を誓い、祖国での婚

礼を控えていた仲だった……」

何と、レオコーンと名乗った黒騎士とメリア姫は恋仲であつたらしい。

「私は深い眠りについていた。そして、あの大地震と共に何かから解き放たれるように、この地で目覚めた……。記憶を失っていた私は、しかしあの異国の姫を見かけ、メリア姫のことを思い出したのだ」

そんなことがあつたとは知らず、ますます戸惑う三人。こんなところにも地震が作用していたのだ。

「……いずれにせよ、私は自らの過ちを正すために今一度あの城へ行かねばなるまいな……」

「ねえリタ、やめた方がいいよ。またややこしくなるだけだつて」

流石のサンデイも止めた。アルティナも何だか難しい顔をしているし、リタもそれは止めた方が良いと思つた。

(王様のご乱心が目に浮かぶようだわ……)

娘を誘拐されかけた親として、レオコーンの事情はすぐに信じられるというものでは無いだろう。

しかも当人が城に顔を出したものであれば……どうなるか分からない。

「ややこしくなる、か……それもそうだな。では、そなたらの方から城の者へ伝えておいてくれないか？　もう城には近付かない、と……」

意外に物分かりが良いらしい。

レオコーンは冷静になれば話しやすい相手であった。……思い込みで暴走するところがたまにキズだが。

（メリア姫のことは仕方ないかもだけど）

「ルディアノ城ではきつと本物のメリア姫が私の帰りを待っているはず……。私はルディアノを探すとしよう」

「ルディアノ？　って、あ……その馬！」

レオコーンは黒い馬にヒラリと飛び乗り、軽快に去って行った。

そして、黒い騎士と馬の姿は、すぐに米粒程度になってしまったのだった。

「武器屋さんの、馬……なんだけど」

「あーあ……これはまた追っかけるしかないわネ」

「今はとりあえず城に戻るぞ」

「このままじゃ、王様が軍隊を出しかねないもんね……」

セントシュタインの王は、王である前にフィオーネ姫の父であった、ということだ。

アルティナの言う通り、今は城で待つセントシュタインの王に真相を伝えるのが先のほうが良さそうだった。

一見終わったかのような事件であったが、このあと更にとんでもない騒動に発展することとなる。

第二章前編（終）

第二章 王都と謎の黒騎士（後編）

「あら、お帰りなさいリタ！」

「リツカ……ただいま……」

黒騎士と別れてすぐ、リタ達はセントシュタインへ帰ってきた。

「あら？ すっごく疲れてるみたいだけど……」

「うん、まあいろいろあって……そうだよ、いろいろあったんだよ
ルイーダさん!!」

リタはルイーダに一つ言いたいことがあった。それは、まあ今回同行した仲間のことなのだが……。

「何でこんなに方向音痴な人紹介したんですか?!」

リタはセントシュタイン周辺の地理を全く知らなかった。そのため、方向音痴のアルティナを同行させるのは、また違う意味で冒険なのだ。と今回気づかされたのだ。

「悪かったな方向音痴で」

アルティナは心なしか、ぶすくれていた。

「アルは悪くないよ、方向音痴なのは体質だから仕方ないもんね！でも見知らない土地で方向音痴な仲間をつけてくれなくてもいいじゃんルイーダさん！-」

やけに力説するリタに呆気にとられながらも、ルイーダは少々意外に思っていた。

ここまで、あの二人が上手くやっていけているとは。

まず、いつもだったら真っ先にアルティナがルイーダの所へ来て「コイツ無理」やら何やら文句を言って仲間を解散していたはずだ。なのに、今回それが無いことに驚いた。

(これは、ひよっとしたら……)

「ちょっとルイーダさん、聞いてるんですか?! ……つくしゅん」

リタのくしゃみに反応したのはリツカだった。

「リタ大丈夫！？ 風邪でも引いたのかしら……」

「風邪じゃないよ…… ちょっと湖に飛び込んだだけ……」

「湖って…… 黒騎士を退治するのに何で湖に飛び込む必要があったのよ」

尋ねると、リタはあさつての方向を向いたので、ルイーダは湖に飛び込んだ原因をアルティナに求めた…… 無言で。

「…… 季節外れの花吹雪だよ」

「は？」

季節外れとか、そういう問題ではない。

「なに、桜でも咲いてたわけ？ でも、桜っていったらエラフィタにしか無いじゃない」

「俺が知るか、あとはそいつに聞けよ」

そんな無責任な。

そいつ、とはリタのことであるが。
その時、“そいつ”はリツカに引きずられ、宿の一部屋に連行されていた。

「リツカ、私は大丈夫なんだってばー!!」

「大丈夫じゃないでしょ！　なんでこんな時に水に飛び込んだじゃったの?!」

「や、だからいろいろあったんだって……!!」

過保護スキルを発動させたリツカを止められる者は最早いない。

「俺も寝る。疲れた」

「は……今から?!」

アルティナはそれだけ言って、宿の階段を上って行ってしまった……。

「ご両人……今は朝の9時なんだけどねえ」

ルイーダの弦きが、室内に空しく響き渡る……。

翌日。

リタとアルティナの二人は、セントシユタイン城の門前にいた。

「すみません……。王様に会わせてくれませんか？」

「おや、誰かと思ったら……黒騎士は退治できましたか？」

応対したのは、いつぞやの隊長さんである。

「これからそのことでお話があつて……つくしよん!!」

リタのくしゃみに続いて、アルティナも咳を連発した。
明らかに風邪を引いたことが分かる。

「お二方……大丈夫ですか？」

「はい……大丈夫です」

「いいから、さっさと案内してくれ」

鼻声で言われても、説得力が無いのだが……。

「二人揃って風邪なんて……湯冷めでもしたんですか？」

「いえ、ちょっとした寒中水泳を……」

「は？」

一瞬、言われたことを理解出来なかった。兵士の隊長は、その言葉に目が点になった……。

「王様、リタ様とアルティナ様でございます」

「おおっ、待ちわびたぞ！ さあ早くこちらへ！ 黒騎士の件、どうであったのかワシに話を聞かせておくれ」

喜々として自分達を出迎えてくれた王に、リタはうつと詰まった。

(とてつもなく……話にくい)

しかしあの出来事は真実なのだから、しっかりと王に話さなければならぬ。

リタはレオコーンのことを王様達に全て話した。

「なに……黒騎士は記憶を失くし、フィオーネのことを恋人と見間違えていただけだった？ ヤツはルディアノという国を探しているため、もうこの城には近付かないと言うのか？ むしらは、その言葉をそっくり信じて帰ってきた……と？」

なんだか嫌な予感がする。

「そんなもの口から出まかせに決まっておろっ！…」

(やっぱりー！！)

信じてもらえなかった。

「お父様っ……なぜそこまであの騎士のことを悪く言っつのです!?!」

フィオーネが抗議しても、王はふん、と鼻を鳴らすだけだった。

「ルディアノという国なんぞ、ワシは見たことも聞いたことも無い。ヤツはでたらめを言っているだけじゃ!」

主張を曲げない王を見て、フィオーネは悲痛に顔を歪めた。

「なぜ信じてあげられないの……? 本当に国に帰れず困っているかもしれないのに……!」

そして王間を飛び出し、走り去ってしまった。

「おいつ、フィオーネ……!?!」

「お姫様っ?!」

慌てて、フィオーネを追いかける。

「リタ様……」

しかし、意外にも王間の入口のすぐ近くにいた。

「お姫様……」

「私、お話ししたいことがあるのです。大きな声では言えませんが、私の部屋まで来て下さい」

ルディアノ王国のことです……。

フィオーネは、リタを自分の部屋に招き入れた。

「お呼びだてして申し訳ありません。この話を父に聞かれるとまた反対されるだけですから……」

フィオーネは、リタに椅子を勧めた。

「私、実はルディアノ王国のことを耳にしたことがあるのです。昔、ばあやが歌ってくれたわらべ歌の中にルディアノという国の名前が出てきて……」

『私はルディアノを探すとしよう』

レオコーンは、確かにルディアノへ向かうと行っていた。もしかしたら、そのわらべ歌に手がかりがあるかもしれない。

「ばあやは今、彼女の故郷・エラフィタの村にいます」

エラフィタとはシュタイン湖の西の方にある小さな村である。

「あの黒騎士は父の言うような悪い人ではありません。そんな気がしてならないのです……」

レオコーンは、自分の恋人であるメリアとフィオーネを間違えていただけ。

「私も、そう思います。だから、」

だから、リタはフィオーネの提案を了承することに決めた。

「必ず、あの人の力になります」

リタが力強く宣言し……

「リタ様……どうか、よろしく願いします」

フィオーネは、幾分か安堵した顔を見せた。

「……話は済んだか？」

「あれ、」

王女の部屋を出た先には、アルティナが腕を組み壁に背を預けて待っていた。

てつきり、先に帰ってしまったかと思っていたのだが……。

「?……なんだ?」

「う、ううん、何でもない! 待たせてごめんね、宿屋に戻ろうか」

そして、次の目的地・エラフィタへ。

シユタイン湖より北、麦畑を通り過ぎると、大木に守られているかのような村が見えてくる。

それが、エラフィタの村。

「あれが桜の木かな?」

季節では無いが、桜が咲いているらしいと聞いた。狂い咲きなのだろう、とルイーダは言っていた。

道中、地図と格闘しながらも無事にエラフィタを発見したり夕。

傍らでは、アルティナが相変わらず咳・くしゃみ、鼻づまりと典型的な風邪の症状で苦しんでいた。

「アル、大丈夫？ ……はつくしよん！！」

そして、リタも苦しんでいた。

「人の心配より自分の心配しろよ……ゴホゴホッ」

「私より辛そうな人が何言ってるの……つくしゅ！」

傍からみれば、どっちもどっちな気もするのだが。

「とりあえず二人とも、安静にしてなさいヨって思うんですけど…
…。どうして出発しちゃったワケ？」

体調を万全にしてからエラフィタに来れば良かったじゃん、とサン
デイは呆れていたが、リタは一刻も早く黒騎士に追いかけたかった。

「だから、アルは寝てていいよって言ったんだよ。私のせいで風邪
引いたんだから」

元はと言えば、自分がアルティナもろとも冷たい湖の中に飛び込ん
だせいである。

そのせいで二人とも風邪を引いてしまったのだという事実がここに。それは自覚していたリタだった。

「にしても、あの過保護なリツカがよく許してくれたわね」

「煎じた薬草を大量に飲まされたけどね」

「……マジ？」

薬草の用途がなんか違う、と思ったのはリタだけでは無いだろう。

エラフィタ村に入ると、一番先に年配の女性を発見した。

「おんやまあ。こんな小さな村に旅人が来るなんて珍しいこともあるんだねえ」

「あの……おばあさん、実は私達……」

フィオーネのばあやのことを聞くと、おばあさんはそのことを知っているようだった。

「ソナちゃんのことさね。今は村の奥のクロエちゃんの家遊びに行ってるはずだよ、そっちに顔を出してみておくれ」

「ありがとうございます！」

お礼を言って、村の奥の家を目指した。

「へえ、これが桜か」

「何言ってるんだ。この前、大量に吹雪かせてただろ」

「へ？」

アルティナの言葉に一瞬キョトンとしていたリタだったが、一枚の花びらを拾い上げてそれをじっと見つめ、ふと呟いた。

「あ、よく見てみれば……」

実物は見たことがなかった。

「天使界には無いからな」

「それでよく花舞わせてたな……」

普通にそう言われても、アルティナは戸惑うばかりで。

天使とか妖精とか、そういったモノは（昔から見えていたけれども）架空のものだと信じてきたのだ。それが当り前にいるものとされている。そのことに激しく違和感を感じた。

いると肯定されたことによって安心もしたのだけれど。

小さい頃から、町で天使を見かける度に（リタ曰く、天使は町または村の平和を守るため見回りをするらしい）自分の目を疑ったものだった。

「あ、あの家かな？」

リタが一番奥にある家を指差した。

「もうっ、ソナちゃんたら……また昔の話を持ち出して」

「クロエちゃん……あたしゃねえ、アンタのことを羨ましく思ったもんだよ」

近付いてみると中からは楽しそうな会話が聞こえて来た。

「当たり前だな」

「じゃ、ちょっとだけお邪魔しましょう」

ドアをノックすると、「どうぞ」という声が聞こえてきた。開けると、テーブルでお茶をしているおばあさん二人が出迎えてくれた。

「あらあら……お客さんかしら？ どうぞこちらにいらっしやうて」

この家の主であるクロエは、快くリタ達を招き入れた。

「お邪魔します。あの、ここにフィオーネ姫のお世話をしていただければあやさんがいるって聞いたんですけど……」

「ええ、あたしが姫様のばあやをしてた者ですじゃ。いったい何用ですかいな？」

答えたのは、クロエの向かいに座っているおばあさんだった。

「はあ、小さい頃に姫様に歌ってあげてたわらべ歌を聞かせて欲しいとな？」

リタの要望に、フィオーネ姫のばあやを勤めていたソナは快諾してくれた。

「いいですともいいですとも。それじゃクロエちゃん、合いの手を
お願いしてもいいかの？」

「黒バラわらべ歌だね？お安い御用さ」

歌は、“黒バラわらべ歌”と言っらしい。

そして、二人は歌を歌い出した。

闇に潜んだ魔物を狩りに
黒バラのく騎士立ち上がる
見事討ち滅ぼせば
白百合姫と結ばれる
騎士の帰りを待ち兼ねて
皆で宴の準備

(あソーレ それから騎士様どうなった？)(

北行く鳥よ伝えておくれ

ルディアノで待つ

白百合姫に

黒バラ散つたと

伝えておくれ

(北行く鳥よ伝えておくれ、ルディアノで待つ白百合姫に 黒
バラ散つたと伝えておくれ)(

「……とこんな感じじゃが満足してもらえましたかねえ？ ところ
でどうしてこんな歌を聞きにきたんですかのか？」

「それは……」

質問に答えようとした矢先、

外から男のものと思われる悲鳴が、聞こえて来た。

そこには、なぜか……

黒い馬に乗った、黒い甲冑の騎士がいた。

「だ……誰かつ、助けてくれえ！」

きこりが倒れ込むように村へ逃げ込んで来た。

（もしかして、モンスター?!）

武器に手をかけ掛けたリタ達だったが、後からきこりを追いかけてきたのは見知った人物であった。それを見た直後、二人は脱力した。

「木こりよ、なぜ逃げる？ 私は話を聞きたかっただけだ」

レオコーンだったからである。

「……レオコーン?!」

「なんでまだこんな場所にいるんだ……」

どこに行ったのかと思っていたら、案外まだ近くにいた。そのことに驚き。

「お前には何もしない。安心しろ……」

「ウソこくでねえっ！ オラ、森の中でアンタのこと探してる女の魔物に出会っただ！ 真つ赤な目を光らせながら『我が下僕、黒い騎士を見なかったか』ってよ……。アンタ、あの魔物の下僕なんだからッ!？」

そして、完全に不審者だった。

「この私が魔物の下僕だと？ 何を馬鹿なことを……!!」

憤慨するレオコーンに、震え上がるきこり。

「く、黒騎士……!!」

これ以上話させてもレオコーンは憤るだけ、きこりは怖がるだけだ。

「そなたは……」

「こんにちはどうも昨日ぶり！ とりあえず、ここで話もなんだから外に行こうか！」

そして無理矢理レオコーンを村から追い立て、なんとか騒ぎに収束をつけたのだった。

「そなたは確か……リタと申したか。なぜこのような場所にいるのだ？」

「ええーっと……ルディアノの手がかりがあるらしいと聞いて、ここまで来たんだけど……」

「そうか、ルディアノ王国の……。こんな私のために、すまない。それで何か分かったのか？」

分かったことはある。

手がかりと言えば、手がかりなのだろうが……。

レオコーンにとっては、あまりよろしくない手がかりであった。

「そのことで聞きたいことがあるんだけど……レオコーン、黒バラの騎士って呼ばれてなかった？」

「黒バラの騎士……確かにルディアノではそう呼ばれていたが……？」

なぜそれを知っているのかと不思議がるレオコーンに、リタはやっぱり、と呟いた。

先程のわらべ歌はレオコーンのことだったのだ。

「なに、私のことがわらべ歌になっていただと……?! どういうことだ、私がおとぎの国の住人だとも言うのか……?」

さすがに動揺したらしく、レオコーンの手綱を握る手は震えている。

「黒バラの騎士が魔物討伐に行くって歌らしいんだけど……北行く鳥に『黒バラの騎士が敗れた』ってことを伝えてくれみたいなこと言っただけで終わったよ……」

「北行く鳥……か」

しばらくレオコーンは考え込んでいる風だったが、やがて決心したように馬の向きを変えた。

「よかろう！ ならば北行く鳥を追うことにしようではないか。真実を掴むためにな！」

「レオコーン?!」

そして、またもレオコーンは軽快に去って行ってしまったのだった。

「また行っちゃった……。どうしよう、私達もレオコーンの後追った方がいいのかな……」

わらべ歌が本当なら、ルディアノは北にあることになる。だが……

黒バラ散ったと伝えておくれ

あの歌によれば、黒騎士レオコーンは魔物に敗れたことになっている。

「レオコーンは魔物にやられて、それから　　今まで何をしてたんだろう……。ねえ……。アル？」

そういえば先程からやけに静かだ、と思い振り返った直後のこと。

アルティナの体がふらりと傾いた、かと思ったらバツタリと倒れてしまった。

「ええええアルー?!」

「すみませーんっ、お医者さんいませんかーっ?!」

「ひええっ、おめえ……。黒い騎士と村から出てった……。って、あれ、あの騎士は……。?」

恐れおののきこりだったが、レオコーンがいなくなったからか警

戒を解いた。

「黒騎士はもう来ません！ それであの、お医者さんは……」

「まさか、おめえが退治しちまったただか?!」

「や、あのだからお医者さ……」

「いやあ、ありがてえ!!」

「お医者……」

「アンタは命の恩人だあ！」

「……お医者さーんっ!!」

業を煮やしたりタがそう叫んだ時。

「悪いねえ、こんな小さい村だから医者はいないのですじゃ」

リタ達を追って家から出て来たソナが申し訳なさそうに言った。

「とりあえず、私の家に来なされ。ベッドくらいは用意できるじゃあ
るって」

「あ、ありがとうございます……！」

ありがたい申し出に甘えることにし、リタはアルティナを運び始めた……というか、ほとんど引きずっていた。

「あれ……さっきの兄ちゃんねえか、どうしただ？！」

きこりは今さらアルティナの異常に気が付いたらしい。

ソナも心配そうにアルティナを見遣る。

「大丈夫かい？ ほれ、アンタも手伝ってやっておやり！」

ソナに叱咤されたきこりも慌ててアルティナを支え、なんとか病人をベッドまで運んだリタ達だった。

「すごい熱……やっぱり湖に飛び込んだのが原因だよ、ね……」

アルティナの額に濡れたタオルを乗せて、リタはガツクリと肩を落とした。

「なんで私は熱出さないんだか……」

アルティナが熱を出した原因が自分にあるだけに、やるせなかった。

「男の子よりも女の子の方が体は丈夫に出来てるからねえ」

そう言って部屋に入って来たのは、薬を持ったソナであった。

「一応、お薬を持って来たんだけど……まだ起きないかい？」

「まだ起きないんですよ……」

かれこれ1時間ほど経ったが、アルティナが目覚める気配は無かった。

しかし、「ここに来てやっと起きる兆しを見せる。

「う……………」

「アル、起きた?! 大丈夫ー?!」

「ゆ……………揺らすな……………頭が……………」

「これこれ、病人をあまり揺さぶるもんじゃないよ」

慌ててソナが止め、揺らすのは止めたりタだったが、相変わらずベツドに引っ付いたままだった。

「ごめんなさい〜! 私のせいで風邪どころか熱まで……………」

「いいから……………さっさと黒騎士追え……………」

「ええっ?! でも……………!」

「早く……………」

そして、またパツタリと動かなくなった。

「うああ待つてアル、薬ーっ！」

しかし、やはりアルティナからは何の反応も無い。
相変わらず、浅い呼吸を繰り返していた。

「……………うう、寝ちやつた？」

「まあまあ……………薬だったら、また起きてからでも良いじゃろて」

ソナは持つて来た薬をテーブルに置き、ベッドの傍らまでやって来るとアルティナの具合を確かめた。

「まだ熱が高いねえ……………こりゃ一日安静にしないと」

「そう、ですか……………」

悄然と椅子に座り直したりタであったが。

「お前さん……これから、やることがあるんじゃないかい？」

「え、でも……」

「この人のことは私が看てるから、いつてらっしやい。大事なことなんじゃろ？」

このおばあさんは存外勘のよろしいお方らしい。

「……いいんですか？」

そう言うと、ソナは微笑んで頷いた。

「じゃあ……お願いします。あの、ありがとうございます！」

とリタ言うのと同時にドアがピシヤリと閉まった。その後もドツタンバツタンと戸の奥で慌ただしく出発の準備をしていたみたいだが、やがて、しん……と元の静けさが戻ってきた。

「ふふふ……かわいいガールフレンドねえ」

ソナはナニかを勘違いをしていた。

「……サンディ！」

リタは村を出てから真っ先にサンディを呼んだ。

「なに、どーしたのよ？」

「アルのとこにいて」

「は？」

「何かあったら連絡ちょうだいね。じゃ、お願い！」

サンディが呆気に取られている間にも、リタはアスリートの「ごとく走り去ってしまう。

「あっ、ちょ……リターー?!」

リタの背を見送ることになったサンディは、はぁ……と一つ溜息をついたのだった。

「なんだかんだ言って、黒騎士とリタって性格似てるっぽくない？」

この時、リタはとんでもない忘れ物をしていたのだが。

サンディがそれに気付くのは随分後のことで、リタが気付くのはもつと後のことだった。

真っ直ぐ北へ向かうと、森が見えて来た。

森と言っても、毒の沼が広がる、枯れ木ばかりの森 滅びの森。

(こんなところに何か建物とかあったりするのかな……?)

疑いながらも森の中を進むと、奥に城の跡と思われる廃墟が現れた。そして門とおぼしき場所には、黒騎士・レオコーンがいる。

門にたなびく旗を見つけ、レオコーンは掠れた声で呻いた。

「……これが、ルディアノ城だというのか……？」

「えっ、これが?!」

どうみても、長年放置されている建物である。数百年は経過しているだろう。

「私は城がこのようになるまで一体何をしていた……。そうだ、メリア姫は?! メリア姫……姫えー!」

「あっ、ちよっ……待って!」

慌てて追いかけたが、建物が入り組んでいるせいか、入ってすぐにレオコーンを見失ってしまった。

「……ど、どうしょ」

必死に黒騎士を追ったせいで、右も左も分からない状態になってしまった。

こんな城の見取り図なんてあるわけもなく、頼れる人もいない。

とはいえ、ここにアルティナがいないことに関してはホツとして
いる。

(アルとこんなところで迷ったら、一生脱出なんて出来ないような
気がするし……って、そんなこと言ってる場合じゃない！)

途方に暮れたからか、思考が現実逃避しかけている。

(とにかく今は……勘に頼ろう！)

その他に、方法なんて無かった……。

「あれ……何だろ、ここ」

朽ちかけた廃墟、その中でもまだ原形を残しているらしい部屋はあ
った。

天蓋付きのベッドがある……ということは王族の誰かの部屋だろ
うか。

「にしても疲れた……。ちょっと休憩つと」

そう言っつてベッドに腰掛けた瞬間、ホコリが舞い上がった。

「うわっ……そうだ、ここ長いこと使っつてないから……」

驚いてベッドを飛びのき、仕方なくどこかに座ることは諦めた。

リタは、かれこれ半日くらいルディアノ城をさ迷っている。
とうぜん、外はもう暗くなっている時間だった。

「松明あつて助かつたけど……無かつたらどうなつてたんだか」

想像に難くない。

「さてと、そんなゆっくりもしていられないし……」

そろそろ行くつ、と階段に向かおうとして、壁に額縁があるのに気が付いた。

「……肖像画、かな」

ホコリやらすすからを盛大にかぶりながらも、薄ぼんやりと人の形に見えるような気がして、リタは額を取り外した。そして、ベッドの布団の端っこでそのホコリを取り払う。

すると、その絵には……

「フィオーネ姫?! じゃなくて……もしかして、メリア姫? 似てるってどうか、瓜二つなんだけど……」

黒騎士が間違えるほど似ているのだから、かなり似ているのだろうと思っていたが。

違いと言ったら、メリア姫の首元にある大きな首飾りくらいか。

リタは肖像画を壁に戻すと、奥から何やら物音がしてくるのに気付いた。

「この壁の奥の部屋……?」

もっとよく聞こうと壁に張り付いていると、言っている内容は分からないが、女性のものらしき声が聞こえてきた。

続いて、男性の声が聞こえてくる。しかもこちらの声には聞き覚えがあった。

「もしかして……レオコーン?!」

声の元へ急ぎ、その部屋を駆け出した。

ドアを見つけ、開けた瞬間目に飛び込んできたのは、王座に座る女にやられたらしくボロボロになったレオコーンの姿だった。

「ククク、バカな男……。あの大地震のせいで私の呪いは解けてしまったけど……いいわ、もう一度かけてあげる。二人きりの闇の世界に誘うあの呪いをね……」

「おのれ……イシュダル……!!」

イシュダルというらしいその女は、瞳の無い赤い目を妖しく光らせて笑っている。

エラフィタのきこりが言っていた赤い目の魔物とは、イシュダルのことであった。

見ていられなくなったリタは、思わずレオコーンとイシュダルの間に割って入る。

「そなた……リタ！」

「アラ……なぐにアンタ？ まさか……レオコーンを助けようって言うのかい？ ククク……あんたもバカねえ。この男にかけられた呪いの威力を見ていなかったの？」

どうやら、レオコーンはイシュダルの呪いを受けて動けなくなっているらしかった。

「……いいわよ。それじゃアンタにもかけてあげる……。私のとびつきの呪いをねッ！！」

イシュダルが、怪しげな閃光を放つ。

避けようも無く、腕を前に翳して防ぐことになってしまったが、どういいうわけか効いている感じが全くしない。

よく分からないままに払い退けると、イシュダルの目は驚愕に見張られた。

「なっ……なぜ私の呪いが効かないっ!? 人ならば私の呪いにか
かるはず……もしやお前はっ?!」

そうか、と得心した。

(私は天使だから、呪いが効かないの?)

「クッ……こうなったら……。スタスタに切り刻んであの世へ葬っ
てやるッ! 死ねえええいッ!」

「うわわ……っ」

イシュダルは、ナイフでリタに切り掛かった。

イシュダルのナイフが頬を掠める。

「あら、どっしたの? さっきから逃げてばかりじゃない」

言いながらも、イシユダルは攻撃の手を止めなかった。

(や、ヤバい……。結構……。いや、かなり絶体絶命かもしれない……)

絶体絶命なそのワケは。

(扇と盾、おばあさん家に置いてきちゃったー!!)

と、そんなどうしようもない理由だった。しかも、今し方気が付いたことだった。

ここまで来て武器が無いことに気付けないとは、相当間が抜けている……。文字通り間抜けである。

どうして気付けなかったのか……。考えてひらめいた。この城で、一度もモンスターと遭遇してない!!

(どうしよ……。私、呪文とかは簡単なのしか出来ないし……。レオコーン何か持ってない?!)

と思ったが……。全身黒くてゴツいレオコーンは、やはり黒くてゴツい武器しか持っていないかった。リタが扱えるものなどあるはずがない。

(あとは……イシュダルのナイフ奪うとか?!)

盗賊じゃあるまいし、そんなことしていたらサックリやられてしまうのがオチである。

すると、やはり呪文で攻撃するしかないのだが、魔法(というか呪い)の使い手にどこまで通用するのか甚だ疑問であった。

(えーと、私が見える呪文は……)

ヒヤド、ホイミ、バギ……全て初級呪文だ。

魔法使いというわけでは無いので、これが当たり前であるのだが。

(でも、これで何とかするしかない!)

意気込んだその時、つま先にコツンと何かが当たり、こけそうになった。

(じ、こんな時に……)

ドジなんてしたら一巻の終わりであるのに、足元の石に躓いてしまつたらしい。

しかしそれを見て、ふとひらめいた。

(成功するか分からないけど……これをやるしかない!)

ナイフの切っ先を避けながらも、リタは水面下でとある行動に移っていた。

「この、ちょこまかと……!」

ひよひよいと逃げるその動きは流動的で、さっきとは比べものにならないくらいキレイにナイフを避けている。

イシュダルの苛立ちもピークに達しようとした時、リタは突如として動きを止める。

イシュダルは訝しんだが、何かを企んでいるとは思いつかなかった。

「もう降参、つてところかしらね？ 私の邪魔しようなんて考えなければよかったものを……」

リタの呼吸は荒く、手足もナイフの切り傷だらけ。その様子を見て、喋る気力さえないのかとイシュダルは思っていた。

「せいぜい、あの世で後悔なさいッ!」

そして、ナイフを振り下ろす。

が、しかし……予想に反してナイフは空を切った上、相手の姿は消えてなくなっていた。

「何っ……!？」

イシュダルの目が驚愕に見開かれる。

相手の声が聞こえてきたのは、そのすぐ後。

「バギ!」

つい先程まで自分が座っていた王座に立っていた。

呪文を唱えると同時に、竜巻が巻き起こる。

それは、地面に転がっている瓦礫をも巻き上げ、イシュダルを攻撃した。

「成功……!!」

リタはせっせと小さな瓦礫を集め、中央に集めていた。

イシュダルに気付かれないようにして、さりげなく集めるのは大変だったが、苛立ちもあってかイシュダルに気付かれることは無く、作戦も大成功。敵は大ダメージを受けるしで我ながら上出来だ。

「おのれ……猪口才な……!!」

怒りをあらわに、イシュダルはリタに向かって行った。

「さっさと死ねえっ!!」

イシュダルのものすごい形相に、戸惑いながらも辛うじて攻撃を避ける。おっかなびっくり逃げ続けていたが、足元不注意により本日2度目の転倒。尻餅をついた。

(こっ、これはシャレになんないんだけど……っ!)

そんな隙を見逃すワケもなく、イシュダルはナイフの切っ先をリタに向けた。

「今度こそ、さよならよ！」

もうダメか、と目をつぶったその時。

何か小さいもの飛んできたかと思ったら、それはイシュダルの手に命中し、持っていたナイフが宙を舞った。

(……………小石?)

目を開け、呆然と石が飛んできた方向に顔を向けると……

「アル……………」

そこには、熱でぶっ倒れていたはずの無愛想戦士が立っていた。

「何なの、アンタ達は……!!」

イシュダルが苛立ちの声を上げる。

しかし、リタにはそれを気にしている余裕は無く、アルティナの体調が心配だった。

「アル……体は大丈夫なの?!」

「大丈夫じゃない」

「大丈夫じゃないの?!」

どうやら熱は下がっていないらしい。体がフラフラしている。

「でも平気だ」

大丈夫じゃないけど平気って、どんなだ。

そうツッコミたくなったりタであるが。

「大丈夫じゃないのに何で来ちゃったの……」

「一応、仲間ってことになってるからな。つかお前、大事なモン忘れてったるーが」

仲間。

一生アルティナから聞くことなど出来ないのでは、と思っていたその単語をサラッと saying してくれたことにア然。
しかしアルティナはどこ吹く風。
リタに「忘れ物」と言っ て何かを投げて寄越した。

「わわっと……あ、」

扇と盾だった。

「リタ~~~~~!」

そして、サンディ付きだった。

「アンタね、自分の武器忘れるとか何やってんのヨ!」

「い、いめんなせよ……」

しかしサンディの勢いはここで収まり、パツタリとリタの上に落ちた。

「サンディ?!」

「も、無理……疲れた……。何なの、アイツ。方向音痴にもホドがあるっしょ……? ここまで来るの、大変だったんだから……」

どうやらやはり、ここでもアルティナの方向音痴は威力を発揮したみたいだ。

「お疲れ様……サンディ……」

劳いの言葉をかけ、リタはまた立ち上がった。

「まだ行けるか」

「もちろん!」

アルティナの問いに元気良く答え、扇と盾を構えた。

「次で決める！」

「笑止……アンタらごときに私が倒せるわけ無いのよ……！」

再び、戦闘が始まる。

刃物のぶつかり合う音がする。

アルティナは病み上がりのせいか、調子が出ず苦戦していた。

(アル……やっぱり……)

ふらつくアルティナを見遣り、心配しながらもイシユダルに注意を向ける。

リタも、限界が近い。

(さっき言った通り……次で決めなきゃ)

「アル！」

体勢を整えるアルティナに話し掛けた。

「私、もうそろそろ限界なんだよね」

「そうだな、俺も頭は痛いしフラフラする」

「それじゃあ……」

次が、本当に最後。

「決めて、さっさと帰るぞ！」

剣を構え、真っ直ぐにイシユダルへ向かった。

相手が振り回すナイフを間一髪で避け、一太刀を入れる。

浅く入ったせいか、致命傷とまではいかなかったらしい。

「ふっ……甘いわー！」

そう言っつて、ナイフを振り下ろしたイシュダルだったが……。

「甘いのはどっち?!」

リタが扇で一閃した。

「これで終わりだ!!」

間を置かずにアルティナが剣でイシュダルを貫く。

「うぎゃあああ——……っ……!!」

再び……レオコーンと私だけの世界がよみがえるはず……だったのに……

妖女は断末魔の叫びを上げ、そして息絶えた。

後に残ったものは、無い。

「メリア姫……」

イシュダルが消えても、黒騎士が苦しみから解放されることは無かった。

「そなたの手まで借りようやくルディアノへ辿り着いたと言つのに……。時の流れと共に王国は滅び、私の帰りを待っていたはずのメリア姫ももういない……。私は……戻ってくるのが遅すぎた……」

「レオコーン……」

時の流れだけは、どうすることも出来ない。たとえ、守護天使だとしても。

(天使なのに、何も出来ないなんて……)

何も出来ないことが悔しかった。

と、その時、入口からレオコーンに声がかかった。

「……遅くなど、ありません……レオコーン」

女の人が、立っていた。

その姿を見て、思わずその場にいる三人は息を飲む。フィオーネ姫にそっくりな顔立ち、そして……

「その首飾りは、まさか……?!」

ルディアノの姫にしてレオコーンの恋人・メリアだった。

「メリア姫……どうして……?!」

「約束したではありませんか。ずっとずっと、あなたのことを待っている……と。さあ……私の手を取り踊って下さいませね、レオコーン? かつて果たせなかった婚礼の踊りを……」

そう言うと、メリアは手を差し出した。
レオコーンは戸惑いを隠せない。差し出したその手に触れることが
出来ずにいた。

「メリア姫……この私を許して下さいるのですか……？」

メリアはただ、笑っていた。

手を取りあい、メリアと踊っていたレオコーンだったが、徐々に体
が透け始め、メリアの手が彼の手を通り抜けるほどとなった。

そして、婚礼の踊りは終わりを迎える。

「ありがとう、異国の姫よ……。あなたがメリア姫ではないことは
もう分かっていました。しかし、あなたがいなければ私は……絶望を抱
え永遠に さ迷っていたでしょう」

レオコーンは、相手がメリアではなくフィオーネだということは分
かっていたのだ。

そしてフィオーネも、そのことに驚きはしなかった。

「あなたはやはり黒バラの騎士様だったのでですね……。初めて会った時からずっと運命のようなものを感じておりました……」

「メリア姫の記憶を受け継ぐあなたならば、そのように思われたのも不思議なことではありません……」

「私が、メリア姫の……!?!?」

フィオーネはメリアの子孫であったのだ。どつりで顔立ちが似ているわけだ、と納得したリタにも、レオコーンは礼を言った。

「リタ……そなたのお陰で全ての真実を知ることが出来た。ありがとう。もう思い残すことは何もない……」

レオコーンはやがて、天に召されて行ったのだった。

「さよなら、黒バラの騎士……」

セントシュタイン・リッカの宿屋。

「じゃあ、そろそろ行くのかな」

黒騎士騒動も終息をついたセントシュタインは、活気を取り戻しつつあった。

「そっか……。いつまでもここに留まってるわけにもいかないもんね」

リッカは、残念そうに笑っていた。

「またセントシュタインに来ることがあったら、ウチにも寄ってっ
てちょうだい」

「そっだよ、いつでも来ていいからね！」

「うん。ありがとうございます」

リッカとリーダーダに曖昧に頷いたリタだったが、実はもう会えるか

も分からない。

天使に戻ったら、リツカ達にリタの姿は見えないのだ。
リタがセントシュタインに来ることがあったとしても、会うことは
出来ない。

(でも、まだ天使界に戻れるかも分からないし……)

というわけで、また戻ってくるかもしれなかった。

「皆さん、お世話になりました。ありがとうございます。じゃあ、
また……」

そう言いかけたところ、ルイーダは「そうだ、」と何を思い付いた
のか、アルティナに顔を向けた。

「アルティナ、町の外まで見送ってあげなさいよ」

「……………え？」

「……………は？」

突然宣告されたことに、リタとアルティナが同時に疑問の声を上げ

る。

ルイーダに紹介され、二人が仲間になった（半強制的）時と同じ状況だ。

違うところと言ったら……。

（アルが渋い顔をしていないとこ、かな……）

あれは本当に不機嫌そのものという顔だった。

しかし、アルティナはというと……そのこと思い出すよりもまず、疑問符が頭の中を占領していた。

なんで俺が。

そう言いたげな様子だったが、そんな彼をルイーダは明るい笑顔で「いつてらっしゃーい」とリタもろとも送り出すのであった。

『思えば、黒騎士も哀れなヤツだったのう……』

ルディアノ城でのことは、フィオーネが王に報告していたため、リタが城へ顔を出すと王は反省の色を浮かべていた。

黒騎士への理解を示した王は、リタ達への褒美だと言って宝物庫の宝を全て与えようとしたが……さすがに受け取れない。せめてものお礼だと言われ、宝物庫の品を一ついただいたのだが。

「……そこで何で金ピカの十字架を選んだんだお前は」

「いや、一番地味そうなのをって思ったらコレになっちゃって」

城の宝物庫は目がチカチカしそうなくらい大量の金銀財宝が眠っていた。

さつさところから退散しようとして慌てて選んだ地味めな財宝が、この“金のロザリオ”だった。

「アルも来れば良かったのにね……」

アルティナは城に行かなかった。……もとい、行けなかった。理由はもちろん熱による体調不良。

あの後、体調が悪化したアルティナはベッドに逆戻りしてしまったのだ。

またもエラフィタのソナにお世話になったあとでセントシュタインへ帰ってくると、念のため医者に見てもらい、程なくして完治。数日間はベッドの上で過ごしていた。

本当にアルティナにはお世話になった。

例えば、湖に飛び込んだり、武器忘れて敵陣に飛び込んだり、などなど。

「アル、ありがとね。ここまで来れたの、アルのおかげ」

アルティナがいかなかったら、どうなっていたことか。

「天使になっても……アルには見えるよね。そしたら私、ウォルロ村で守護天使やってるので、良かったら遊びに来て下さい」

「俺が行くのかよ」

不満げながらも、アルティナは苦笑した。

「お前がここに来ればいいだろ」

「……守護天使は休暇とか無いんだけど」

だから、護っている村と天使界の行き来しか出来ない。他の場所に行く機会が無いに等しい。機会があるとしたら、他の村町の守護天使に任命された時だけである。

「だったら抜け出して来い」

「職務放棄しろ!？」

そんなことしたらどうなることか……考えたくもなかった。

「だいたい、俺がそんな村辿り着けると思っか？」

「あ、そっか」

アルティナは極度の方向音痴だったということをおぼろげに覚えていた。

「じゃあ、私がセントシュタインに来るしか……」

とは言え、まだ天使界に戻れるかも分からないので。

「天使になったら、どうやって行くか考えとくよ」

もしかしたら、何年もかかるかもしれないけれど。

「というか、天使に戻るのか？」

「そこが良く分からないところなんだけど……」

戻れなかった時のことは、あまり考えたくない。

「まあ、とりあえず行ってこい」

「そうする。じゃ……またね！」

リタは満面の笑顔でお別れをした。アルティナも少しだけ笑っていた、気がした。

これが最後じゃないと、信じているから。

また会える日まで。

第二章後編（終）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7878z/>

ドラゴンクエスト? ~天恵物語~

2012年1月3日14時53分発行